

大正四年度

敍勳の恩命を受けし所感

一民間の女子教育者にして今回の恩命に接した人々の中に、私も亦その一人に數へられたことは實に恐懼感佩の極みである。思へば此の學校が初めて我が國に生れ出たのは今より十五年前乃ち明治卅四年四月廿日であつたが、其の年の九月廿五日には早くも此の私立の一學校に帝室から恩賜を蒙つたことは實に破格の恩命である。と時の本校評議員岩倉公爵も云はれたが、其の後も内親王殿下の御成りあり、又先きの 皇后陛下の行啓内定の御沙汰のあつた事もあり、而して明治の末年には今の 皇后陛下時の 皇太子妃殿下の行啓もあつて、屢々破格の御取扱ひを受けた事がある。今回の敍勳も亦今後益々奮勵せよとの思召を以て、わが此の女子高等教育を御獎勵の畏き思召より出でたる事と拜察し奉りたゞ感銘の外はない。されば私一個人としては勿論のこと、此の女子大學とても、尙未成品の事であるから、其の功勞を表彰さるゝと云ふ事は實に恐懼に堪へぬ次第であるが、上述の通り私は御獎勵の意味として有難く拜受致したのである。

而もこの恩命は私一人が受くべき功を爲したのではない。偏

に創立以來十五年間一日の如く奮闘し來つた我が校教職員、並びに卒業生及び學生諸子大方の女子高等教育に努力するものゝ爲に下されたる御獎勵の恩命である。私はその代表者として拜受したのである。されば代表者の私が恩命を拜受するに就いては即ち全校教職員全生徒擧つてこの恩命に答へ奉るべき報恩感謝の念を以て、今後益々奮闘し 陛下の深き御思召に酬い奉るべきは言を重ねる迄もなく、教職員並びに學生諸子も亦その覺悟のあることであらうと思ふ。

〔家庭週報〕第三百四十二號 大正四年十一月

一週一信をはじめむるに就て

人間は常に何物かを求めて居る、そうして求めるものは必ずしも與へられて居ない、そこにさまざまの疑問が起つて來る、そして、迷ひを生じて來る、遂に希望を失なふ。そも／＼人生の目的は何か？ 心に斯ういふ疑問の起つた場合には矢張、どうかしてこの問題を解らうとする追求心に満足を與へなければならぬ、即ちこの問題に對する相談相手が必要である。

家庭週報の日頃の抱負であり且重大なる任務として居る所は、即會員並に讀者諸子の斯かる場合に於ける相談相手ともな

り慰安ともなるといふことであるが、それも未だ刊行物としての経験を積む爲めにその目的とする所に充分に達し得ないといふ所もあり、理想の十分の一をも實現することが出来なかつたが、併し今は、母校女子大學も創立以來はや十數年となり、家庭週報がこの形に生れてからも既に數年を経たのであるから、其所に要求のある所、任務として盡すべき所も漸次明かになり、今は又、世界の氣勢も轉換しようといふ時機に到來して、婦人の任務もいよ／＼重くなつた事である。

この時に於て、わが家庭週報は、いよ／＼此の目的とする所に向つて決心を明かにし、益々任務を全ふしたいと云ふ要求から出發して、この點に於て、會員並に讀者諸子の期待にそひたといふことで、其れに就いて、其の指導の責任を予に持つて呉れるやうにといふことである、つまり毎週一度の無形の會がこの紙上に於て行はるゝことを要求するのである。予は予の多忙な生活から考へて、果してこの要求期待に對して満足なる相談相手となり且必要に應じて指導の任務を盡し得るかどうかを危ぶむものである、併し家庭週報の編輯擔當者のこの要求は非常に大切な問題であつて、その方法も當を得たものであるから、予が多忙である故を以てこれを肯むことは予に於て出來ない事である。

さらば、出来るだけ盡してみよう、と約束したわけである、次號からはこの紙上に一週一信として、予は會員及讀者諸子と共に現下最も知らんと欲する精神界の生活を開拓して行かうと思ふ。繰返して云へば家庭週報は即我々の精神生活の仲介者であり、表象である、この本體は會員自身であり讀者自身であり予自身の精神生活である、この各自の生活を如何にするかといふ、それを此の紙上に於て相談しようと思ふのである。

（「家庭週報」三百二十三號）大正四年六月

予の見たる自殺者の病源

—

有爲の青年が自殺する。これほど悲しい事はない、人間にとつて生きるといふことほど重大な問題はない、その生きる希望を失つて自ら殺すといふことは人間生活の變調である、何等かそこには重大な原因がなくてはならぬ。

自殺者は青年男子に多い。けれど最近の死亡率は年若い女子にも著しく増加して居る、これも變調である、これ又何の原因する所でありませうか。一人一人に就いて取り調べて見たならば種々に複雑した原因があるに相違ないが、私はこれ等の自殺

者乃至天壽を全うしない自滅者の多い原因を、ある共通する所に見出すのである、即ち當今の社會傾向の一表徴（しじが）であらふと思ふ。それ等の人々が自分を知らないといふことと従つて自分を信ずる力の無いさうして自分の境遇を物質界にも精神界にも見出すことが出來ず之に對する信念を涵養することが出來ないといふことから煩悶し、自棄し、遂に生存競争の落伍者となるといふことはこれを意志薄弱と云へばそれ迄であるが要するにこれは内面的原因と云ふべきもので、一方外部の原因を探究して見ると、其所には意志薄弱なる、心身虛弱なる青年男女を益々多くつくり出す社會の缺陷を見出さねばならぬ、境遇が悪いといふこと、それは弱者の爲めに先づ第一に考へねばならぬことである。

X

私の書齋の裏庭に數十株の孟宗竹があります、私はその若竹を益々殖して葉を繁らせたいと思ひ、兩三年來は春に出る竹の子を折らせないやうにして育てました。ところが、どういふものか、すく／＼と生（お）長た若竹が古い竹よりも早く枯れてしまふ。私はこれを見ても生きて行くものに與へられた境遇と、其所に生きて行くものとの關係といふやうな事を益々考へさせられた事である。一定の場所に多くの竹を養ふということは、一

本一本の竹の爲めにはその境遇の配分の少ないことは誰れにでも考へられることである。限りのある土地に益々増加する人口の一人一人の配分は漸々尠くなる、生存競争は其所に起る、弱いものは其の境遇の制裁に支配されて自滅するのである。

X

今日の社會を組織して居る今日の青年男女は何れも明治の教育を受けたる人々である、さすればこの人々の煩悶、矛盾、意志薄弱、人生問題に就いての無解決及今日の社會の不統一といふことは、つまり明治教育の結果を示すものと見ねばならぬ、明治の教育を受けた今日の青年、壯年が如何なる社會を組織（つく）つゝあるか、其の活動が國家の上にならぬ風には現はれつゝあるかを見ると、たゞ失敗、行詰り、問題、紛擾で内外の事状は益々危機に迫つて居る。けれど、これを解決する輿論も出なければ人心を統一する處の大人格も表はれないといふ有様である。それ故一方には就職難を歎ずる者があるかと思ふと一方には又人材の乏しい事を語つて居るのである。斯様な有様であるから、今日の社會の真相を探れば探るほど其の表れて來るものは困難、煩悶、失敗、自殺、大死、墮落、意氣銷沈といふやうな事ばかりである。今日は最早、國民の凡てがこの病狀に陥り、國家の柱石となるべき青、壯年が神經衰弱に罹つて居ると

いふことは誰れも知る所である、けれどこの病氣の根本診断を行ひ、その養生法を確定して實行するに至る迄の根氣もないといふことは實に憂ふべきこと、云はねばならぬ。

×

我れ等が今日最知らんとする自己の問題、國家の問題、人類の問題の解決は、云ひ換ふれば即この病後及び治療の方法を見出すといふことである、最急を要する問題はこれである。

二

明治の教育が物質的文明の開拓者を作ることに急いで、たゞ智識を與ふることのみに偏したといふことは今日の意志薄弱なる青年男女を作つた一大原因であると言はねばならぬ。

勿論智識を與ふことも必要な事には相違ないが、これに偏して人格根本の培養、生命永久の道を打捨てて置いては、智識授與は徒らに人間を機械的にし目前のことに没頭させてしまふことになる、其の結果は常に根本要求を満足不能はざるが爲めに、終に煩悶、疑惑、絶望に陥らしたのである。

×

人格根本の培養とは何であるか、之れは言ふまでもない、人間の本質の發展を指すのである。此の人間の本質が自由に發展

し、人格生命の泉が滾々として盡きざる所に、人々の智識は進むにまかせて力を増し、文明の華は開くのである。其所には失望もなく、煩悶もなく自殺自滅の原因をつくるなどのことはない。斯くの如き個人は難に當つて益々向上し、老いて益々旺盛になるのである。

×

次には從來の人格養生が只教訓を與ふることによつて出来るものと思つて徒らに虚無の形式に擒はれて却つて人格の泉を涸渴せしめたのである。例へば教育勅語と云ひ、或は儒教の經書といひ、或は佛典といひ、又は基督教の聖書を以て人格養成の根本義となすものがあるが、此等の大聖の教へは勿論尊い、併しながら其の言、其の書は所謂教訓となりたるもの即教訓といふ智識に過ぎぬものである。教訓といふ智識を、そのまゝ心に暗じたり、或は注入したからとて生命にはならない、人格は上らぬのである。

×

人格はもとこれ、心と心の交通に依つて育てらるるものである。又個人の心と宇宙の偉靈（宇宙の靈氣）とよく交々感じて其所に初めて生命が生れ發展するのである。反覆して云へば人格と人格、人格と宇宙との交通を爲し得るその力が人格であ

る、——人格の本質は人の靈である。この靈がまことに鋭敏に、まことに完全に、まことに鍛へられて眞に生きたる活らきをなすといふ事が即人格の價値である、そうせしめることが生命を養ふといふことである、生命を養ふといふ事は即眞の人格教育である。然るに。

×

たゞ教訓、信條を以て人間の生命が養はれると考へたのは間違ひである。ゼームスの口調を以て言へば聖典經文は偉人の生命を我れ等（人間）に通はず電線である、我れ等の靈を養ふ、材料である又道具である。けれどもこれが直ちに生命を養ふものと思ふのは間違ひである、なぜならば同じ電線にも活きたる電線と死せる電線とあるではないか、此の活た精神の通はぬ宗教の經文聖典其の他の教訓は死んだ電線に過ぎないのである。

×

今日の所謂教訓といふもの、所謂宗教といふもの、それ等は凡て尊い偉人の人格精神を傳ふる電線である、併しそれを受け入れる人々の方法があまりにその型に拵り、末に走つて偏したる智識注入に傾いた爲め電線は凡て死線になりつゝあることを省みるものがなかつた、教訓はあつても、宗教はあつても青年の生命が育たなかつた原因は其所にある。煩悶し惑ひ求めて與

へられず、失望落膽するに至る逕庭の根本は其所にあるのである。之れを縮めていへば此迄の修養教育は智識だけに止り、之れを消化し之れを徹底し之れを確信し之れを意志し之れを生活し、終に之れを人格化する信念生活にまで到達し得なかつた爲めに終に今日の病弊に陥つたのである。

〔家庭週報〕第三百二十八、九號）大正四年八月

信念生活とは何ぞや

信念は人格の根柢、道德の原動力、眞理の本體、愛の淵源であつて、これ以上の眞理、これ以上の價値これ以上の理想、これ以上の善、これ以上の完全、これ以上の幸福、これ以上の意志はない。實に此等の總てを融合し含蓄する根本生命なのである。此の根本生命を吾人の日常生活に於て體現してゆく努力が、即ち自己發展の生活となり、向上更生の生活となり、自恃奉仕の生活となり、満足悅樂の生活となり、安心立命の生活となり、至誠敬虔の生活となり、普遍徹底の生活となるのであつて、この唯一の根本生命の具體的に現はれてゆく姿を各方面から看取するときに、それ／＼善美を極めた種々の向上生活となるのである。信念は實に吾人の全生活を支配し衝動し充實する

全生命に外ならぬ。

それゆゑ信念は善美を極めた力であつて、其の眞趣は到底口にも筆にも言ひ盡し、説き盡すことができない。従つて之を明らかにとらへ知らうとするならば、身自ら之を體驗し、之を直観して、親くその内容に接觸感銘する外はない。けれども信念生活に智識的作用も加はつてゐる以上は、此の方面から出来る限り各要素に分解し、之を再び全體に組織統合して見るといふことが其の本質を握む助となり、又實驗し修養する上に適切な方針を發見する方法となるのである。それで此の立ち場から信念生活の形式的要素を觀察して見ようと思ふ。

一 信念に智識の必要ありや

前に度々信念を缺く單なる知識の死物に過ぎないこと、その生活上に無力無効なものであることを繰り返して述べて置いたが、その意味は決して信念に知識的要素が要らぬものであるとか、害になるものであるとかいふことではない。否却つて知識といふものは本當の信念を涵養し確立するために缺くべからざる要素である。若し信念に知識の要素を缺くときには、單なる盲目感情のみとなつて、或は偏狭に流れ、或は迷妄に陥り、遂に救ふべからざるものとなることがある。

「鰯の頭も信心から」といふ諺があるが、此の諺は一方に信仰の力の如何に微妙な且つ強烈なものであるかを示すと同時に、一方には如何に其の知識を無視し判斷を暗ます傾向があることを示してゐる。人がよくいふやうに、信仰は知識の沙汰ではないと言つて、若し善惡正邪眞偽を辨別することなく、全く無批判的受動的に信仰を受け容れることになると、其の結果は生活を向上させずして、却つて人格を墮落させ、甚きは狐狸を怖れ方角を忌み、日、時をも氣にかけるやうになる。かうなると、安心の道は却つて不安の本となり、精神の力は却つて逡巡の枷となり、解脱の門は却つて煩惱の關となつてしまふ、世の中に愚者の迷妄、偏見者の我執ほど困るものはない。殆ど救ふに道がないのである。此の如き邪境に陥ることを防ぐには、どうしても科學的知識、哲學的理念を借りて、明晰な批判力と、「眞」に徹せざれば止むこと能はざる理知的良心とを養はなければならぬ。

x

われ等が信念涵養の爲に知識を必要とするわけは、此の如き内面精神上の危険に陥ることを防ぐがためばかりではない。外界に於ける思想の混亂と誘惑とに對して、適當に批判選擇を加へなければならぬからである、即ち外界社會から迫り來る危

險に對して、自己の精神生活を防護するために、最も必要なのである。今日に於ては、倫理主義にも、哲學思想にも宗教信條にも、又藝術思潮にも種々様々の學説があり、流派があつて、互に相爭議し、辯護し、衝突し杆格し、異論百出、紛然雜然たる有様であるから、其の中から最もよく我が要求に適合するものを選び採るのは容易なことでは出来ない。又その總てを整理して取捨し按配し、我が生活に於て統一するが如きは非常な難事である。さらばと言つて、此等の外界潮流に對して全く眼を塞いで、無關係で居るといふことは、社會的生活を營んでゐる限り、到底出来ないことである。我に外界刺戟に反動する力のある以上はどうしても人の好奇心を惹くに足るべき魅力ある精神的刺戟に感じて、之が爲に動かされなわけにはいかないのである。又此の性質が外界から滋養分を吸収して自己の精神を育て、ゆくのに缺くことのできない要件なのである。果して然る以上は、吾々は内に於て此の力を指導し統御し、外に於て諸種の學說思潮を批判し選擇し、以て確乎たる信念の涵養に資すべき理知の力を具備しなくてはならぬ。知識は我が精神生活に於て、退いて守らんがためにも、亦進んで戦はんが爲にも、缺くべからざる武器である。いかに勇猛なる向上精神の意志があつても、此の武器を忘れて、赤手空拳で敵に立ち向つたので

は、勝利を獲ることは甚だ覺束ない。それ故信念生活には、大に此の知識の銳利堅硬を要求するのである。

×

そこで信念生活の圓滿充實を期せんが爲めには、先づ知識と信念との差別を明にし、而して兩者の一致協働すべき要點を發見しなければならぬ。併し此の兩者は共に同一精神力の異なる作用、異なる方面なのであるから、根本的に區別さるべき者ではないので、知識とは重に洞察力批判力の働きを指し、信念とは重に感情内省の方面を指す。一は客觀的にして明瞭ではあるが、皮近有限である。一は主觀的にして朦朧ではあるが、深遠無限である。兩者が同一精神の働きとして現はれるにつれ、同一對象であつても、その見方に依つて、或る場合には知識として取り扱はれるし、又或る場合には、信念として取り扱はれる。而して信念は重に情意作用の上に立脚地を置いてゐるのであるから、理智の上に優勢を占めて居るのであるが、信念を合理的ならしめて、信念の信念たる形と働きとを支持させる爲に缺くべからざる要素は此の知識である。即ち信念をして徹底せる眞理たらしめ、確定不動の基準たらしめ、實地の發動に妥當を得しめるといふ役目を務めるものは、實に知識である。

×

知識は此の如く健全安當なる信念を作るに缺くべからざるものであるが、その知識は普通によく理解されるやうに、分析比較推論判定等の如き、科學的哲學的研究、更に言へば論理的方法とその成果とのみに限るのではない。直觀的洞察力微妙なる想像力等をも働かせなくてはならぬのである。吾寧ろ吾人をして眞の信念を捕捉せしめる主なる要件は、實に我が人格に内在する最深の理性、即ち睿智の靈力に外ならぬのである。換言すれば吾人が各自の合理的實體を以て、其の以上の合理的靈體たる宇宙の實體に到達しそこに信念を發見し、捕捉し、構成するには、是非とも此の人々本具の最深の理性、睿智の靈力の活動に依頼しなければならぬのである。

成立上及び實行上に徹底した意味で言へば、知識の件はない信念は無いと同時に信念の件はない知識は無いのである。若しさういふ知識と信念とがありとすれば、それは孰れも生命の被殻である。無力無能、何の役にも立たないものである。

二 信念と感情(趣味及興味の信念)

前號に於て信念と智識(眞理の信念)に就いて略説した。さてこれに次いで當然云はなければならぬ事は信念の基礎、信念の眞髓たる感情、情緒、情操等である。信念が行爲の動力とする

のは即ち之に由るのである。さうして、その最深の根柢は實に、人類的遺傳、宇宙的本能に外ならぬのであつて、之を宗教的本能と稱するのである。此の本能には各種の力が融合され含蓄されてゐるのであるが、それは常に何等かの目的を追求してゐる。さうして吾人の人格に現はれて、吾人の傾向となり、趣味興味となり、動機となり、欲求となり、意志となり、種々の様式と程度とに於て活動するのである。而して又此の本能の力は多くの根幹に分れて、深く吾人の潜在意識の土壌中に入り込んでゐるのであるが、その中の最も強い力、最も大なる根を成してゐるものは、即ち「愛」と稱する情緒である。

愛情の系統脈絡の中には、同情とか、惻隱とか、諒察とか、慈悲とか、親切とか、敬虔とか、至誠とか、犠牲とか、堅忍とか、喜悅とか、幸福とか、満足とか、渴望とかいふやうな、種々の感情的の作用が含まれてゐる。さうして諸種の刺戟に應じ、機會に現はれて、相互扶助、共通恐怖、共通運命、共同事業、四海兄弟關係、國家關係、家族關係等となつて、人生社會の基礎組織を成すのである。

愛の脈絡系統は啻に此の如き有形の社會關係を成すに止まらず、遂に高く進展して、遂に神聖なる普遍無限の愛の實現となる。即ち神の愛と人間の愛との根本關係が現實に發展して、そ

こに感覺以上の精神世界が築造されるのである。宇宙萬象は實に神の愛の笑顔に外ならぬのであつて、人間の眞の本能といふのは、即ち其の神の愛に反應する、感覺そのものであり、而して吾人が生活の動機は此の愛を追求する自發力に存するのである。それ故人の眞の渴望は愛であつて、之に満足を得且つ之を發展せしむるのが即ち信念生活であるのである。

×

人類の感情が神の愛に連る他の根幹を趣味と名ける、趣味は美を慕ふ感情であつて、愛情とは密接にして離るべからざる關係がある。即ち美とは愛の完全に表はれた状態、又愛を發展する心情を指すのである。故に美は愛の産んだ子供であるとも言へる。此の愛から産れた美といふ子供が発育し生長して、こゝに花笑ひ鳥歌ひ、風薫り雨煙り趣味の世界を展開し吾等の壯嚴なる大宇宙に煦々たる悦と幸とを満たすのである。但し此の美の表現に就いては、後に復云ふ機會があるつもりであるから、此處には唯其の大本を一言するに止めて置く。

×

信念に於ける情の要素は此の如くに重大な役目を持つてゐるもので、其の力に依つて、自愛と他愛、愛國と人道、社會心と宗教心との調和統一が出来、そこに永遠不朽、圓滿普通の愛の

全相が渾然として現はれるのである。而して又此の力に依つて、人の全生活を向上精進に向つて絶えず押し進め、人格實現完成の努力を永久に新鋭ならしめるのである。

二 信念と意志（道徳と信念）

信念生活とは如何なるものであるかに就いて私はこれを智、情、意の三方面より解かうと試みます、併しこれは假りに分けた三方面であつて、もとより信念生活の内容は一にして二、三にして一に歸すべきものであつて、その何れを一つ區別して離すと云ふことは出来ない事である、而も今茲に云はんとする意志の信念は、その最内在の力である、即力の中の力、信念の中の信念である、人間のこの力が一たび外部に向つて發展せんとする時、其所に生の要求が起るのである。「如何にして生きるか」「如何にして價値ある生を見出すか」といふことは生ある人間の止むに止まれぬ要求であり願望であり又凡ての力の動機であり又生きたる事實である、この力こそ即人間が宗教を要求する所以で、この力の要求を如何にして實現せんに努力するかは即意志の信念である。この信念が日常の生活に又精神生活に乃至日常の仕事の上に實現さるゝことに依つて初めて信念生活を爲し得るものといふべきものである。

×

然るに、屢々云ふ如く、明治の教育はあまりに智識に走つた、さうして其の極はこの人間の天性を無視し、この止むに止まれぬ要求を他所に、徒らに人工的形式の生活に陥らしめた、爲めに、青年は機械的智識に捕へられて其の生活は淺薄無味となり、その元氣は磨滅しさうとして居る。然し人間はいつ迄も斯の如く表面的智識に依つてその内なる心の満足平和は到底得られないのである、自然の要求は遂に、この形式的智識生活、有限の人工生活にあきたらずして茲に一大反動を起した。今日の藝術、今日の思想界、今日の人間生活の衷心要求は形式を超越したる所の、眞に内なる心の満足を要求して來たり有限なる人智の世界を脱出して直ちに無限なる永久の力を得ようとして居る、其所に生の價値を認めようとして居る、若しこの内なる心の満足が得られなければ寧ろ死を要求する迄に殆ど必死の力である、必死の要求となつて起つて居る。

×

斯の如く、今日の青年男女がその必死の要求を以て如何にその意志の貫徹を欲して居るかは凡ての生活方面の事實となつて表はれて居る、私は今夏、丸善書店でその賣行きの多いといふ書物を聞いてこの讀書界に現はれた事實に依つても殊に青年の

要求が奈邊にあるかを知ることが出來た、それは八月中旬の調べであるが、かのタゴールに關する書物(原書)が既に六百部以上賣て居る、メーテルリンクのものは(これも原書)で三千部以上に達して居る、殊に今年の二月十二日に翻譯發賣し初めたタゴールのものが七月に至る迄に十版を重ねたといふこの讀書界の傾向を以ても今日の青年が如何に、何を、求めて居るか察知せられるのである。

×

形骸ばかり残つた昔の信仰では満足が出來ない、眞の要求を満さうと思ひ、又眞に自分の要求する所を實現せんとせる強い意志の自發力が其所に生れて來る。これは宗教の古い新しいではない、新舊共に、何か其の要求の下に新しい生命の生れること、その生命ある經驗を願ひ求めて居るのである。ミセスエヂー女史(クリスチャンサイアンスの主唱者)が百萬人以上の信者を集め日本の中山みき子といふ一婦人が天理教を開いて今日尙多數の信者を持つて居りヴラバツキー夫人が靈智宗教を創始したのは何れもその何れにか求めて居る生命の通ふ所があるからである、たとひ小さくとも其所に眞の生命の通ふ所があれば、生命に饑え機械的生活に疲れたる人々は恰蟻の甘きにつくやうに求め集つて行くのである。之れに反してたとひ嚴めしい

宗教が如何に大なる權威を示さうとも若しそれが生命のない形骸のものであれば人々は煩悶し失望し遂に死するのである、この現象を見て宗教の權威が衰へ、人間の信仰心が薄らいだと思ふのは淺慮である、生命を求めて與へられず、たゞ形式の宗教に捕へられて不満を感じ悶え苦しむ心は即人間の意志の根底にある所の止むに止まれぬ力である、信仰心の衰へたのでない信心堅固の平和満足を求めて止まぬ内なる力の發現である、これを益々よく導きこの心を光明に向はしむることは即生きたる宗教の外に何ものもない。

×

凡そ世の中の動搖の裏には止み難い憧憬、熱望、愛慕がある。その自動的撰擇力は即人間の意志である、意志——凡てのものゝ裏に潜む力の根底であり権力である、それ故信念は即意志、生命は即意志とも云へるのである、意志は人間生活の根底であり又その全體である。尙更に詳しく云へば意志は態度の決定である、自分が自分を決めることである——我が生に對する態度、宇宙に對する態度、自己に對する態度、人に對する態度、眞理に對する態度——の決定である。故に意志といふものゝ内容は實に豊富無限であり多種多方面である、故に信心堅固なる意志の内容には感情の傾向流動、要求の満足、目的的確

立、主義の確信、實行實現の熱誠がある、されば、意志の活らきはもとより直觀的、創始的活動があり従つて理想高潮、人格の緊張、集中、自發自動の力の自由、精神生活の雅境に入るといふやうな實感を持つのである。

×

併しこの信念の態度を得る迄には非常の奮闘努力を要することである、その正しい態度を以て正しき決定を爲すにはあらゆる反對あらゆる誘惑に戦ひ、凡ての感情を制御統一して稍もすれば動搖し混亂する思想を常に安定の満足を得しめねばならぬ、斯の如くにして眞理を愛する意志に初めて満足を與ふるのである、これが即意志の本務(道德的意志)である、若しこの境地に達する迄のその勇氣を缺き、理性を缺き、所謂、他動的信仰に陥るならばそれは、即人間の道德意志の墮落である、迷路に陥るのも止むを得ない。意志は實に態度の決定、境遇の決定、進路方向の決定である、これを例へば、智識は船の羅針盤であり、感情は之れを動かす力であり、意志はその船長である。信仰の強いといふことは即意志の力の強い事である。

この道に生活する時は他の凡ての富貴榮華を捨て、孤獨を感ずることはない、それは即永久無限に活き益々修養し益々發展せんとする内なる力の意志の信念に生きるからである。

意志の活動は即行爲である故に、行爲の伴はぬ信仰は遂に死に衰へる信仰である。

彼の「山を動かす信仰」といふ事がある、これは文學者が單形容詞に用ひたものではない、實に眞の自分の意志は即神の意志であり、宇宙の意志であり、神の思想であり宇宙の思想である。其の思想、意志と合體してその理想目達に集中して行く、又一方には益々高潮に達し發展して行く所に神の意志が體現するのである、つまり神と我と合體すること、共同すること、同じ意志同じ主義の下に人と我と協力することである。世俗を離れ妄念を捨てた自己の意志の獨立であつて決して孤獨ではない、この自我に依つて立つ所に愛國心を生み、その國家の目的はやがて宇宙の目的に合體するものである。

意志は自己の主義を決定しこれを行爲に於て實現する、其所には必ず自己の天職を見出して自己の生活に對する態度の確立を得るのである、この天職に向つて努力奮闘し而して必ず爲すの力を以て堅忍不拔の態度を必ず成るの確信を持するもの即意志の信念である。

〔家庭週報〕第三百三十・三十一・三十四號

大正四年八月〜九月

自己の信念

—

人間は常に辯解的である。

×

と泰西の哲學者もいつて居る、凡ての人間はそれが爲めに墮落します、光明の生活を失つてしまひます、若し、自分に信ずる處あつて行ひ、念ふ所あつて實現する事に何の辯解が要りませう、何の説明が必要でありませう、たゞ信ずる處を行へばそれでよいのである。

×

けれども信ずるものゝない時、人間は必ず自分の行ひに辯解を附けやうとする。

×

如何なる場合にも自分の眞の心の證明ほど確なものはないのである、その生活の始終に於ても自分に依るより他に道はない、にも關はらず、過去のことを懐ひ未來を疑ひ、そうして逡巡として眞剣になつて事を決することが出来ぬ、つまり何ものをも得ることが出来ぬといふことになり、信念の得られ

ないのも其所に原因するのであります。自己の行爲を常に辯解的の態度に在るものは、つまり自分の本心を行ふことの出来ぬ人間で云はゞ精神的に牢獄に居るやうなものです。人々は、よく／＼自己といふものを考へて見ると、果してこの牢獄に繋がれて居らぬものが幾人ありませうか。

×

自己の信念を得やうとするものは、先づこの牢獄を破らなければなりません、つまり他人に依つて動かされる脆い心、外部の境遇に依つて變る浅い慮へ、さういふことのすべてから脱れて、眞に自發的の要求、それで生きて行くのが眞に意義ある生活をするといふものである、自己の信念も其所で初めて得られるのであります。其所の境遇に達する迄の努力修養はなかなか容易な事ではない。

×

『學校は精神の感染する一種の傳染病院である』と云つたのもつまり斯ういふ精神的牢獄を脱し得ないものゝ爲めに、眞の自己を見出させやうとし、眞の光明ある生活を見出させやうとした言葉であります。

×

人間が生きて行く上には研究もし、事業もして行かねばなり

ません、そのどちらをするにしても、自發的の生活であつて初めて意義あるものである、愉快である勇氣に其所に出て来る、光明も認められるのであるけれど、若しそれが反對に、遂に其の光明も見出せないたゞ／＼外部のこと表面のことに躊躇として所謂精神的牢獄の生活に在る時は、其の生活は無味乾燥となり、生命は死んだと同様である。

×

境遇、外見、といふやうな、さういふ外部の束縛から脱するといふことはつまり日常生活に於ける財産とか、地位とか虚榮虚偽とか、さういふことの凡てから超越しなければならぬといふことであります。人間の眞の價値を見出すのに貧乏も境遇も他人の批評も支配される要はなく、又恐るゝに足らぬものであります。

さて、其れ等の牢獄を脱し得たならば、其所に今一つの大切なことがある、それは進むといふことである——目的は一つの自我である——この目的に向つて進むことそれが即、生の意義である。常に新に、常に生れ常に克つ、といふことは生きて居るものゝ價値であります、生の本質はこれで、若しこれが出来なければ満足は出来ない、自己の天職といふことにも行くことが出来ないであります。

×

人間の各自には自己獨特なる天職といふものが定まつて居ります、これを全ふする事に依つて人類社會、宇宙に對しても自己の存在の意義を全ふすることが出来るのである。

×

勿論、それにも種々な努力が要る。

先づ消極の方面からいふと、忍耐一時機を待つと云ふこと。落膽せぬといふこと。つまり目的を捨てない、人を恐れず境遇に支配されないといふことである。

人生の悲劇は、生の實現に缺くべからざる試金石である。悲しい事の與へる困難な經驗は、やがて深い喜びを経験させる階段であります。

古來、人間が神の愛に生き、永劫の安心を得て満足なる生活をするに至つた動機は多く其の人々に人生の悲劇を経験させられた事に始まつて居る。例へば親に死別するといふこと、愛せらるゝものに逝かれたといふこと、これほど人生の悲劇はない、嬉しい事、悲しい事につけて益々寂寞を感じて來る。

併しこれが神の愛を見出さしめるものである永久無窮の愛を見出さしむるものは悲哀である。人生には幾多の困難があり悲哀があります、併し又其の内に憧憬があり目的がある、其れを

求めて行く處に困難は益々加はるけれども、忍耐しなければならぬ。その目的とその努力を捨てずして俟つ處に神と合して得らるゝ喜悅がある。

主義の勝利、目的の勝利の外はない。

これが我に幸福、力、満足を與ふるものである。境遇に支配されて居つた自分がそれを支配するに到らなければならぬ。

二

人間といふものは自分の心の置き所で悲しくも嬉しくもなる、強くも弱くもなる。さうした人間の生活といふものはどちらが眞の生活をして居るといふものであらうかとさへ疑を以て來る、つまり人間の本質といふものは何であるかといふ問題である。

×

自分は何であるか、と斯う眞面に自分といふものを突き詰めて行くと、それは人間の一人といふことになる、さうしてこの人間の形を備へて居る自分の身體といふことは見逃すことの出來ぬ自分の所有である、其の外に眼に見える何物もない、それ故或る人は自分の身體は宇宙の實體であると信じた、これは科學研究から發見した立論であるが、併しこの物質論は、やがて

人間の死といふ事に至つて満足なる解決を與へることが出来なかつた。そこで之れに反對して起つたのは人間の本質は精神即形而上のものであるといふのである。身體はその器に過ぎぬ、されば自分の本質といへばその身體を云ふのではなく、精神、人格、靈魂を自覺することに依つて認められるのである。と、この説は多くの人に稍満足を與ふるものであつた。けれども亦あまりに精神萬能で物質といふものを全く無視した立論である、例へば人間の身體も死ぬれば其の形は無に歸つてしまふではないか、即本來の無に歸つたので身體があると思つたことが既に人間世界の迷ひである。物質に生命はない、それ故生れるといふことが抑迷ひの始めである、身體の病氣といふことも實は迷ひである、死ぬといふことも物質界の迷ひである。物の形、物の色さういふ者は宇宙の本質ではないので、凡の現象は皆人間の迷ひであると信ずるものである。併し事實、人生は永劫である、生活も永劫である、又物質も無であると否定することは出来ない、天地の間にあるものは凡て宇宙の事實であるといふことは誰れも認めぬわけには行かぬ。

×

茲に第三の説が起つて、物質も精神も其の程度の差こそあれ凡て此の本質の體現であるといふ説明を以てこの問題を解決し

ようとして居る、即人間の肉體と精神とを全く別物とすることは出来ない、有形の物質にも本質の體現を認めると同時に眼に見えぬ精神界にも體現を認めるものである。つまり天地間に在りて在るものゝ凡ては宇宙の實體である。それが人間の眼に有形であらうと又無形であらうと、本質の體現に變りはない。同時に人間に生命があれば木にも草にも石に土にも生命があると云ふのである。

茲にいふ所の自己の研究を徹底すれば宇宙の本質は何であるかといふことも自然に解つて來るのである。又宇宙に體現して居るもの何にてもたゞ一つのものゝ研究を推しすすめて行つて其所に徹底することが出来たら其れに依つて同時に自己は何ものであるか、宇宙の本質は何であるかをも解することが出来るのである、要するに何處からでもよい唯一つの問題を捕へて其れをつき詰めて行く所に其のものゝ本質を見出す、一つのものゝ本質を見出さば其れは即自己の本質である、宇宙の本質である、われ等が晝夜に夢寐に知らんとする人間の歸趣、宇宙の歸趣の解決がつくのである、さうして自己自分に最近の問題であり疑問であり追求である、自己に對する信念を追求することはやがて人生萬事の基點である。

×

以上の如く宇宙の本質は自己の以外にも無限にある。宇宙の現象は幾萬にして盡せない、けれども内に人間の自己の心理に體現する宇宙の本質も亦無限である、これほど自分に近いものはない、この事實を捕へこれを追求し研究し證明して行くのも亦自己である、最近徑で最單純に示された人生の問題は自己の研究である、さうしてそれは自明の眞理です。

この眞理を追求し解決するものでなければ未だ眞の人間にはなれない、信念は得られない、即價值ある人生は送れないのである。最近徑で單純な事實であるけれども亦人生重大な問題で、生死の巷に立つ高遠な謎の如きものである、人生の凡ての創意の基點である。

×
或る人は次の如く語つた。

「私に本質の一片を下さい、さうすればあなたに宇宙のすべてを見せて上ます」

本質はわれ等の意識の一々に籠つて居る、それを信ずることが出来れば、即其の意識を以て宇宙の自然も、神も、人の本質も見ることが出来るのである、一片の本質——人間の意識——は凡ての宇宙を見る眼である。又或る人は次の如く云つた。

私の立つて居るこの土地の一點を下さい、さうしたならば私

は世界を動かして見ませう。——（無限の力を得る意味である。）
エマソンが、草花の唯一つの本質を知ることが出来れば世界の凡てを知ることが出来るといつて居るのも同じである。

私の本質は、私の考へて居る所、感じて居る所、其所に私といふもの、本質が體現して居るのである、其所に——其の本質のある所に私といふもの、價值があり、又これあるが爲めに私といふものがあるのである、又我れあるが爲めに其所に宇宙本質の體現を見、神の體現を見るとも云へるのである。

故に、本質を知るといふことは自己の内外に無限にある本質を自覺することである、捕へることである、さうして其の最初に捕へたる一片の本質は宇宙の凡ての通信を受けるボタンとなるべき者である。

×

従來、科學者は宇宙を有機物と無機物とに大別して宇宙の説明を試みた、さうして其の有機物は生命があるものとし、無機物は生命のないものとした。併し今茲にいふが如き説明を以てすれば宇宙の本質は一つである、生物、無生物の區別はない、それはたゞ現象の差異で本質に於ては違はないのである。されば「自己の研究」はいと小さい問題である、けれど又最大なる解決の鍵である、草花の生命、小石の存在に就いて考へる様な

い疑問は又同時に宇宙を解決せんとする最初の努力である自己
信念を築く礎である。

×

そこで、我々人間の個人は宇宙の本質を蔵する種子である、
この種子の核を圍む層は幾重か重つて居る、芽生ぜんとする核
の邪魔ものは煩悶、誇慢、不眞面目、利己といふ心の幾層の外
圍である。我々が赤裸の自己を見出して其所に自己の信念を築
かうとするには先づこの外圍を破らなければならない。

而も幾層の外圍に取りまかれやうとも、この中心に蔵する核
は死なない、我が意志は何ものと云へども奪ふことは出来ない、
世界の重さを以てしてもこれを挫くことは出来ない、それは宇
宙と同じ無限の價値を存する個人の生命であるからである、
我々がこれを自覺した時に我々の眞の喜びが得られるのであ
る、無限の喜びは最大の喜びである、即皮層の自己を失つて眞
の自己を見出すのである。

されば自我の本質は睿知直覺から來る神と我れとの交通する
處にある、即自發發展する意志である、これほど富裕なもの
はない、これほど愉快なものはない、これほど價値あるもの
はない、此處に即自己に對する信念が起るのである。

〔「家庭週報」第三百二十九・四十・四十三號〕

自然と自己

絶對者に對する信念

—

大正四年十月—十二月

私のこの十數年來は殆ど都會生活ばかりであるから自然に接
するといふやうな機會が極めて尠ない、たゞ一年の中の夏期の
旬日又は數日を信州の輕井澤に過す習慣になつて居るが其の時
は私の最も自然に親しむ時である、私の自然に對する感情を養
はれたのは此處である。最幼少の頃は故郷の田舎に育つて而も
武的教育を施された方であるから鐵砲を持つて野山を走り廻り
猪や兎の跡を逐ふて獵を楽しむといふ風であつたから求めずと
も自然には朝夕に接して居つたのである。けれどもそれは鳥獸
を征服し自然と戰つたのであつて未だ自然に親しむ、自然に抱
擁せらるゝといふ所の感じはとても味はひ得なかつた時であ
る。然るに輕井澤に於て養はれた自然に對する感情はそれと大
に異なるものがある。私が初めて輕井澤に行つたのは最早十二
年前の事と思ふがその後年々に、度數を重ねるに従つて其の偉
大な自然の益々奥深い境地を探し得る心地がして飽く所を知ら

ない。近年は夏は避暑客がだん／＼集つて来るやうであるが私が初めて住つた頃は夏さへ人煙稀れな山間の一僻地であつた。私は其處で全く世間と掛け離れた自己の生活、自己の研究を試みたのである。

×

山に行つて木蔭に倚り書物を讀んで居ると自分の立つて居るつひ二三間前に山鳩山鳥などが群をなして飛んで来る、人を懼れる氣色もなく悠然として又向ふの谷へ飛んで行く、私はこの境遇に立つて、嘗ては山へ行けば鐵砲を肩にし、鳥を見れば日頃の修練を試みたいとばかり考へた以前の自分と比べて自然及動物に對する親しみの心が養はれて行くことを思はずには居られなかつた。

私は又この境遇に居る時は人々との面會も成可避けて、只自分一人で研究にのみ集中することに努めた、相對するものは自然ばかりである。而も晨には淺間の噴煙を見上げて雄大なる自然の活力を嘆美せずには居られない、夕は無際限の天空を仰いで、眼を遮るものもない高原の月や星を眺め、無限漠大なる神祕の感を懷くのである。この時いつも私は考へる——誠に自然は斯の如くにして人間を抱擁し、人間は斯の如き崇高なる自然を友とし親しむ事が出来るのである。——然るにたゞその境遇

に到るには人間の思想があまりに賤しい、卑い、狭い、さうして淺薄である、若し人間の思想が自然と同じく偉大であるならば、其所には必ず人間と自然との交通が行はれる、人間が自然を解することが出来て自然はあらゆる美を以て人間を慰めるであらう。

×

十九世紀文明の著しい特徴は自然研究に原因する、彼の進化説の如き大なるものの發見は此の世紀である、この自然研究に基いて即人間が自然の祕密を發見した程度に依つて其の時代々々の美術、宗教、哲學、政治、社會制裁、教育凡てのもの進歩の跡が見える、如何なる偉人も如何なる學者も常に敬虔の念を以て自然に對して居る、さうしてこれから學んで居る。人間が自我を研究し自我を進めて行くのには必ず其所に自然との交渉が起らねばならぬ、即自然から學ぶのである、自然を解するのである、自然を讀むのである。所が人間には昔からのたとへに「論語讀みの論語知らず」といふことがあるやうに、これほど日常自然に接して居りながら、自然が語つて居る意味の解せないものが澤山にある、書物を讀んで價値あらせるのは其の文字が語る所の意味を正直に解する事である、自然が示すさまじまの現象は自然の意義を描き示す表徴である、この書を讀

み得る人間が初めて自然の意義を體得することが出来るのである、今迄祕密になつて居つた世界を其所に發見するのである。

×

自然は幾世紀を経て悠然自若として居るが如くである、而も實は時々刻々に變化して居る、たゞこれに接する人間の理解が其の外面にのみ止まるのと、其の内面に及ぶのとの差である、書物を素讀するのと、これを理解して實行するのとの違ひである、十九世紀文明はその物質に現はれた自然の研究をしたのである、即科學的研究の態度を以て微細に自然の現象を分解し説明した、其所に多くの發見があつた、けれども量り知られぬ自然の祕密はたゞ其の物質現象にのみ止まらない、物質は其の本質の表徴である自然の意義を描く書物である、此書物を讀んでその深遠なる思想を了解しなければならぬ、其所に多くの發見が殘されて居る、其所に人間の自發的生活が拓かれ行かなければならない、其所に新しい創造があるのである、この創造こそは今世紀の新藝術であり新宗教である。

×

自然の悠久なることを最感ぜしむるものは天體である、殊に夜の星である、彼の無數に見える光りの中には幾千萬年前に發した幾億里外に在る星の光りもある、エマソンは云つて居る、

「空氣の透明なるは、かの諸の天體に依つて、崇高の美が永久に存在することを人に知らしめんが爲めである」と。又「若しこれらの星が一千年に只一夜しか現はれないものであれば人は如何ばかりかその奇蹟的榮光を歡ぶであらう、又如何にそれを語りつぐことであらう、然しこれ等の美の使節は夜毎に現はれては微笑むが如く宇宙を照して居る」。

併しこれは星のみではない、凡べての事物、何れの時間何れの季節も——若し人間に於て眞に心を拓いて觀るならば——皆これに似た感銘を與へるものである。さうして自然も人間と等しく生命ある同族であるといふ親しみの念を禁じ得ない。而も自然の美は崇高である、自然は決して卑陋な容貌を表はさない、見苦しい着物をつけない、これに對すれば自ら敬虔な感が起る、如何なる賢者もその祕密を見盡して自然に對して遂に崇拜の念を失ふといふが如きことは無いのである。左にエマソンが自然に對する眞情を語つて居る一節を引用して見よう。

「自然は決して卑陋な容貌を表はさない、最も賢い人でも、自然の祕密を奪ひ、自然の完全を悉く見盡して好奇心を失ふが如きことはないのである。自然は未だ賢者の玩具となつた事はないのである。花や動物や山は、賢者の幼時の單純な心をば喜ばしたと等しく、彼の最圓熟した時代の智慧をば反映

する」と又

「自然に就いてかく語る時、吾々は心中に或る明確な然かも最詩的な感じを覺える。但しこの感銘の差は樵夫の伐る一個の材木と、詩人の見る樹木との間に區別を生ずる差である、私は今朝二三十の農園から成立つて居る愛すべき景色を眺めて居る。某氏甲は此の畑を所有し、某氏乙はかの畑を所有し、又某氏丙は向ふの森林地を所有して居る。然し此等の中誰一人もこの風景を所有するものはないのである、——蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの出来る眼あるものゝ外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。卽斯の如き所有する人は詩人である。この財産こそ、此等三人の農園に於て最優れたものであるが、彼等の所有證明書はこの財産に對しては何等の權利を與へぬのである」と又

「現實の悲哀に暮るゝ身も自然の面前に立てば奔放なる喜悅の情が其の身内に流れる」と云つて居る。

詩人は、哲學者は、藝術家はこの自然の畫を感得した時の止むに止まれぬ喜悅の情をその創作及製作に表はすのである、斯の如く自然の感化は實に無際限である。私が輕井澤の風景を愛し、此所に日本女子大學校の三泉寮を置いたのも卽學生をして

この自然と親しみ、この自然の書物を讀ましめんが爲に與ふる境遇である。

二

自然はさまざまの問題を提供して人間の注意を引き付けようとして居るものゝやうである、私は心靜かに自然に對する時、私の頭腦の中には一物のわだかまりもなくなる、現實生活の煩瑣を脱して、識らず知らず思想の世界を辿りて行くのである。壯美な感情、悠久な感情が私の心の底を流れて来る。卽自然は常に絶對の世界を暗示して居る、靈に就いて何物かを語つて居る。私は先づ自然が提供する第一の問題を解かうと思ふ。

×

一、自然（物理界）には生命があるか、といふ問題である。

人間の身體と精神といふことが研究された結果、身體が動いて居る時は精神の動いて居る時である、精神の働く時は身體も休んでは居ないといふことを知つて來たのである、併しその中の礦物は休んで居るではないかと思ふ人もあるが、これは力であつて矢張働きである。精神は身體に移り、身體は又精神に動く、——嬉しい、悲しい、痛いといふ感じなどが其の人々の顔色に動く、顔色の動きを見て精神の動きを見ることが出来る

——これは皆意識コシヤネスと身體ハノミナとの間に起る關係である。

× 自然は宇宙の意識を映す身體である。

宇宙の意識は自然に關係する、さうして又自然の活動は宇宙の意識である、即自然の力と云はその意識の表現である。美しく可憐に咲く野の花にも其所に自然の意識の表現を思はずには居られない、その形、その色は花を以て表現する自然意識の情である、人間はその表現を見て自然の神祕の情を受け入れるのである。自然は其の情の動きに依つて花さま／＼色さま／＼に表現するのである。又彼の悠久無限に見る天體も、常に流れ變化し動き進化して居る人間の眼に恰靜物の如くに映り恰死の如く見ゆるものも皆其の中に動き活らく力——意識——を持つて居らぬものはない、世界の萬物は皆人間と等しく生きたものである、生命あるものである、生命といふは絶対不朽の宇宙の意識である。

×

斯ういふと、人々は再び考へざるを得ない、即宇宙の意識とは何であるかといふ問ひである、これを一言に云へば宇宙の本質である。

二、本質は絶対思想であるといふことが出来る。

人間が自然に對する時、其の心境は清淨になる、さうして其の自然の感化力は無言の内に煩瑣なる俗界との交通を隔離せしめ、人間の想像力のある限りに其の思想の翼を擴げしめ、心靈の向上する極度に迄導き行く、さうして誰れも斯の如き境遇に置かるゝ時必ず多少（程度）何者か神聖なる感じに觸れ自らも亦神聖なるものとならざるを得ないやうになつて來るのである。即初めて絶対といふものに觸れたので初めて絶対の思想を了解し始めたのである。今迄は物質の關係といふだけの外は何にも氣づかなかつた自分が初めて物質以外の何物かを見、何物かを知覺し、何物かを了解することが出來た時である、この時に初めて、物質のみの關係は絶対意識から云へば極めて遠い末枝であつて寧ろ生命には關係のない一場の夢の如きものであるといふことを悟るであらう、この夢の世界から醒めて初めて自己の實在を見出すのである。即物質——時間と空間とを含む——を超越した所に不老不死の生命のあることを感得するのである、それは即絶対意識である絶対の思想である。

×

此思想こそは無始の古から存在したものである、太古以來宇宙の諸現象は即この思想を書き表はして居るのである。即、自然は思想の産物である、思想あつて自然が出來た、さうして人

間に思想があつて初めて自然を読むことが出来るのである。されば人間の直接の知識は必ず吾が心理状態である、即自然の思想を読み得た程度に有するものである。それ故世界の思想の變遷するといふのは人間が自然の思想をある一定の程度迄讀み了へて、より以上に進まうとする時に起る進歩のあとである。シヨツベンハウエルは次の如く云つて居る。

世界は理想^{アイデア}である、理想は意志である、即目的的世界である、吾人が目的を持つ如く世界も亦目的を持って進んで居る、それ故、世界と吾人とは互に了解し合ふことが出来る、世界は考へる力がある、吾人が知るといふこと、考へるといふことが出来るのはこれあるが爲めである。

今日の所謂世界の知識の根元は皆宇宙にあるのである。宇宙は凡ての知識の原書である、人間はこれを翻譯しこの書を読み其の宇宙の抱ける思想を了解しその心理状態と同じ形にならんとし且なりつゝあるのである。

凡てのものゝ形には必らず思想がある。この思想を悟らねば人間の眞の生活は出来ない、この意味が解つて初めて人間生活の發達向上が出来るのである、今日の科學の發見は即自然の書を繙き宇宙の思想の一部を發見したのである。

所謂、天啓といふは人間が天地自然の思想を正しく讀むことである。これに依つて科學者も哲學者も藝術家も人生に新發見を齎らし、新創作を生むのである。

「吾人は神の思想を繰返して考へるのである、科學の眞理も嘗昔一度書かれたものである、吾人が神の思想を讀む時恰も地中に埋められたる寶を掘り出す如く吾人の思想に翻譯せらるゝのである。云ひ換ふれば宇宙の思想が吾人を通じて表現するものである。」

と一哲學者は云つて居るが、この考へは數學者も屢々これと同じ意味で「自然の中にも偉大なる智的概念が充ちて居る」といふことを驚歎して居る。

されば神は到る處に——天の高きにも、海の深きにも、空氣の中にも——存在するといふは、神は即思想であるからである。これを體現する自然界は又勿論宇宙の思想である。天地は凡てこの思想の體現でないものはない、人間も亦この思想の完全に進まうとして居るのである。

×

されば、科學者を濾過して翻譯した自然の思想は所謂自然研

究を進めて来る、若し詩人、畫家、彫刻家、音樂家、建築家を
經て表現さるゝ自然の思想は藝術の光輝を生むのである。

藝術は宇宙思想の最大最深なる表現である、如何となれば眞
の藝術は宇宙の思想を最もよく讀み、最深い感銘をその人々の
最調和したる美の形式に依つて表現すべきものであるからであ
る。一片の木の葉、一條の光り、一幅の風景、山岳、太平洋に表
現したる宇宙の思想は人さまざまに相似たる感銘を受けること
である、けれども藝術家は其の最深き思想を讀み、これを新ら
しき形式に依つて創作表現する人である。故に自然の本質を解
し得らるる人に於て藝術は進み人生は向上するのである。云ひ
換ふれば宇宙の本質を讀み得る人に於て眞に藝術を解し、眞に
藝術を解する人は眞に自然を讀む人である。

藝術は直觀的創意に成るものであるといふことも即さまざま
の翻譯説明に捕はれずして直ちに本質を讀み得るに非らざれば
味ふことの出來ぬ境地に在るものであるからである。即自然の
暗示を受けるといふことは人間がよくその思想を讀み己れ自然
を愛することに依て知ることの出来る自然と自己の思想の交通
である。

×

美は自然の感情である、この感情は藝術の形と色の構コンポジション圖で

ある、即詩人はこの自然の感情を讀み、この自然の美を所有す
る人である。つまり藝術家が自然の感情を感受してこれをさま
々々の形式によつて發表するのであるから、其の藝術は自然の
感情の表現であるといふと同時にその藝術家の感情であるとい
ひ得るものである。されば再び云ひ換ふれば藝術の藝術は自然
である、さまざまの形、さまざまの色にはみな自然の思想感情
の表現でないものはない。

故に藝術の産物は取りも直さず宇宙の本質を書いた書物であ
る、されば自然研究をせんとする人は又詩を解す人でなければ
ならない。

×

斯ういふことは誰れも臆げに感じては居るけれどもそれを理
解しようとしなない、ただ漫然と見逃してしまふのである。が、
今茲に、靜かに自然に接する機會があつて、其の充溢した自然
の愛の暗示に氣がつくと、誰れも誰れもその日頃の疑問を追究
せずには居られない。

靜穩なる風景の中に立つと、人は何となく恰天性に歸るが如
く美はしい感情に歸る、さうして其の時眼に映る野や山や畠や
森は恰もそれらの自然と人間との間にある不可思議なる關係を
暗示するやうである。其の時自分の頭には孤獨といふ感じは少

しもない、草も木も皆知己である、野も山も清新な姿を以て接する舊知である。この時人々が受ける感應は所謂高尚なる思想、高尚なる理性と信仰である、草木と人間と、偉いなるものゝ一部として何の差があるであらう、若し暴風が靜穩なる空を荒らすことがあれば人間の恐怖も彼等草木の恐怖も同じであらう、又日光の照り輝く下に喜悅の日を送るならば人間の幸福も彼等の幸福の心と通ふであらう。自然の愛は何處如何なる處にも現はれて居る、さうしてそれは宇宙の目的々意志である、人々はこの思想々々を感じ得る程度に於て今日の世界の文明を生み、今日の人類の活動を永久に進歩向上せしむるのである。

それ故、凡ての基は勿論自然の秘する思想意志に在る、けれどもこれを人生に實現するのは寧ろこの思想意志を感受する人々の思想の調和に在るといはねばならぬ、感應する人々の思想の價值に依つて自然は或は偉いに、或は小さく、或は美に或は憂鬱に、或は愛に或は冷酷に現はるゝであらう。

〔「家庭週報」第三百四十四・四十五・四十七號〕大正四年十二月

女子の高等教育問題

女子の高等教育の門戸が開けたのは最近の事であつて、女子が大學に入り學術の蘊奥を究める事の實現さるゝに至つたのも最近の事である。今文明國と云はれてゐる獨逸でも女子の高等教育の必要を認め各大學に女子の入學を許すに至りしは數年前の事で、それ迄は餘程の要求があつたが孰れの大學も門戸を堅く閉ぢてゐたのである。然れども茲數年間に大學に入學する女子の數は年と共に増加し、今日では五千人以上の婦人が入學してゐる。其學科に就いても文學美術の女子に適してゐるは誰れも知つてゐるが、殊に科學や醫學等を學んで女子も斯く高き專門教育に耐へ得るのみならず、其蘊奥を究め得る能力のある事を認められるやうになつた。かくて段々博士等になる人も殖ふたのは、獨り其國の學術界に勳功を現はせしのみならず、世界的に大發明大著述等をなして、世界の文明に貢獻した女子も少くはない。我國では男子でさへも未だノーベル賞金を貰つた人を聞かないが、ラヂウムの發見者マダム、キユーラの如き、其他二人の女子が此名譽を荷つてゐる。以上は獨佛の有様を述べたのであるが、一番世界で女子教育の重んぜられ、全體から云つても最も進んでゐるは英米である。無論孰れの大學にも入學を許され、唯ケンブリツチとオックスフォードを除いて他は學位も與へられ、研究科生も舊くからあり、又女子の發明する能

力も増して來たと云ふ事である。又今日歐米の文明に遅れたり
と認められて居る、露國でも官立や私立の大學が出來、女子の
大學生活をする者は増加して來た。斯く露國でも女子の高等教
育に耐へ得る事を認め、其必要をも認むるに至り、女子自らも
却々向上心が強い事を示してゐる。此頃露國から來た人が日本
の女子が大學に居らぬを見て驚いたと云ふ事であるが、日本で
は女子の高等教育、大學教育の必要を識者の間には認められ、
これが必要とする人も段々多くなつて來たが、然しまだ東洋流
の女子と小人は養ひ難しと云ふ思想が強いにも拘らず此度文部
省が女子の爲めに一面に於ては門戸を開き又これを認め學位も
與へんとして居る事は、寧ろ世界の歴史から云ふも珍らしい事
である。即ち何れの國でも女子が努力し試みの第一に女子自ら
が價を現はして遂に之を認められたるに至つたのであるが、我
國ではさういふ困難を経ずして斯くならんとしてゐるは、時勢
の進歩であり又大正の御代の女子の責任の重くなり、且つ女子
自らも自覺して來たと云ふ曙光と云つてもよいであらう。

それで今後我國の婦人が自分の内から起る向上心を満足せし
め、又女子の家庭に對し國家人道に對しての大なる責任を完う
するには是非高等教育の必要なるは云ふ迄もなく、又女子自ら
も之れを要求し段々其力を現はして來る事は洵に必要である。

斯く氣運は廻り來て境遇が開けんとしつゝ、あるは女子の爲に祝
すべき事であつて、其境遇の開拓も外國に比較して容易なりし
やう見る人もあれど、つまり明治の女子教育が其基礎を作つて
ゐる事は明である。又女子が夫れ迄發展せんとして非常に努力
忍耐し困難と戦ひし事が其基をなして居るので決して偶然では
ない。例令外から與へられるも其基がなければ其境遇を自ら利
用する事が出來ないのであらう。今我國の女子教育の現状と世
界に於ける五十年間の各教育歴史を研究して見るに、女子も高
等教育を受けるに足る能力を備へてゐるは勿論、又何れの方
面、即ち國家社會の上から考へて見ても必要な事は無論の事で
あるから、今後我國の婦人も充分の覺悟を以て其處迄進まねば
ならぬのである。大に將來に希望を有ち今日の女子に取つて最
も幸なる御代に生れた事を感謝し祝すると共に、又之れを以て
満足し運が開けたからと安心すべき場合ではない。今後益々其
實質を備へ價値を現はし、眞に其地位に進むやう女子自らが努
力せねばならぬ。今女子の高等教育、大學教育に就いて文部省
から案が出て調査會の問題となつて居るが、調査會でも反對の
人もあり、又樞密院には保守的思想の人も澤山ある事であるか
ら、此問題もどうなるか未定である。又制度が設けられるもど
う開拓するかは非常な努力を要する問題である。故に眞に女子

教育を高め其理想を實現する事は、婦人自らが爲さねばならぬ事で、殆んどこれが今後如何に發展するか、又蹉跌するかと云ふ事は共に國家の運命にも拘はる程の大切な問題であるから、茲に女子自らも非常な覺悟を要するのである。(談)

〔新女界〕第七卷第十二號 大正四年十二月

我等絶對に生くとは何の意味ぞ

—

我々が、絶對と名づくるかの言葉に盡し難い宇宙の本質に就て、その具體的説明を求むるものがあつたとしても、それはたゞその體現象徴である所の自然の姿、形に就ていふの外はない。恰人間の心とはどんなものであるか、といふ問に對して我々の肉體及其の行爲によりて證明するの外に方法のないのと同じである。我々が體と心といふ二にして一の人間といふものを成して居るやうに、宇宙も亦形に現はれた宇宙と、形に見えぬ靈との二にして一のものである。たゞ我々人間は、何事も形に見ねば満足することの出來ぬ習慣に陥つて居る、けれども形のないものを直に觀ることは出來ない、それ故形に見ることの出來る一方面と形に見ることの出來ぬ他の方面との關係を探つ

て、無形ものを觀、無限ものを知る修養を積んで行かなければならぬ。但しこの關係が解らねば、我々自分の體と心との關係も解らず従つて、如何にして生活すべきか、といふことに就ても知ることは出來ない。

宇宙の普遍的秩序と法則

そこで具體的に表はれて居る宇宙の自然や人間の體に對して、無形なる宇宙の靈及人間の心といふものに就て考へて見ると、先づその特質の一に數ふべきものは宇宙全體に渡つて普遍的秩序があるといふことである、我等はこの普遍的秩序に馴れて、その力が何處から來て居るかといふやうな不思議を不思議としない、けれどもかの所謂天意の配劑の如何にも周到綿密に行はれて居ることに讚美の言葉を屢々發するのである、例へば我等の肉體に就て考へて見ても、その一絲紊れざる微妙なる活らきは人爲の動かし得ざる秩序ではないか。ジヨージ、ハーバートといふ詩人は人間の體の微妙な構造を讚美して次のやうに謳つて居る。

人の身體は悉く均齊にして

鈞合はざる所なし。右の手は左の手と、またすべての部分は世界の全部と鈞合ふ。

而して、何れの部分も最も遠きに隔つるものをも、兄弟といひ得べし。

それ人知れぬ親睦の、頭と足ともあればなり。

また頭と足とは、月と潮とも親睦をもてばなり。

.....

.....

又、

我等のために風は吹き、

大地は休み、天は動き、泉は流る。

眼には見ゆるものは悉く吾等の利益となり、娯樂となり、實

となる。

宇宙全體は糧を供ふる戸棚か、

はた吾等の娯樂室か。

星は吾等を寢床に誘ひ、

夜は窓掛を引き、日はそれを取り去る。

.....

.....

おゝ偉なるかな神の愛！ 人は一つの世界にて

なほ己に待く他の世界をも有てり。

○

斯の如く、我等の體は決して無秩序無關係のものではない。それ故肉體と心とは二つの方面から説明するけれど實は離すことの出來ぬ一つの調和體である。我等はこれを有機的關係といふ。

この關係を知らんとして人は生理を學び解剖をなす。それと同じく絶對の關係を知らんとすればその一部の人間を學び自然を研究して始めてその統一する所に達するのである。

○

さて自然の姿と宇宙の靈との關係も亦勿論これと同じである、されば人間の肉體にも、自然の姿にも、人間の心にも、宇宙の靈にも凡てのものに通じて同じ秩序同じ法則が行はれて居るのである。これを指して普遍的秩序といふのである、即絶對の法則を實現する筋道である。

この法則によりて宇宙の凡ては統一せられて居る。されば、これは抽象して出來た觀念ではあるけれど所謂抽象ではない事實である、絶對の一要素の眞理である。但しこの普遍に對して特種といふものがある。これは宇宙の凡てのものゝ兩極である。人間の感ずる愛は常に特種的のものがある、親子、兄弟、友達、夫婦の愛はそれである、けれどもこの愛も轉々として生

長して行く、即特種から入りて常に普遍的愛——永久的愛に進まねば遂に枯れるものである、つまり絶対と共に居るものでなければ、形の分離と共に遂に離れ、形の消える時に、その愛も枯死するのである。

絶対は思想なり

外圍(自然)は内的世界(靈)の幻影である。といふことは自然の世界も靈の世界も一つのものである、肉體も心も一であるといふことになる。それ故絶対は思想であるといふ時には、無形の靈の世界をも亦有形の自然界をもさしていふのである、かの靈の世界に秩序法則ある如く自然の世界にも秩序法則が、より明瞭に了解を與へて居る——天體の運行、氣候の變移、風雨の原則の如く——。茲に於て自然は宇宙の思想の實現であるといふ事も明かに感得出来るのである。

目的的生活

斯の如く、絶対は一つの目的に統一して行く思想である。その目的を實現せんとする凡ての計畫があり、この計畫を立つる所に宇宙の秩序があるのである。即宇宙は常に目的を迫行して居る所の進化である、天地は悠久として恰も靜かなるものゝ如

くに見えるけれども、其の中には常に目的に向ひて進行せんとする烈しい活動が例へば地球の地熱の如くに燃えて居る。これ即人間生活と、宇宙の大目的と相一致し得る所以である。我等絶対と共に生く所以は此處にあるのである。今日の思想研究は茲に達しなければならぬ、繰返して云へば宇宙は思想である。又秩序的のものである。又目的々のものである。さうして凡ての靈は宇宙のその分派である。故にその宇宙思想(絶対思想)の影響をうけ、それを感じ、それと共に共同調和する時凡てのものは歸一するのである、満足成功を感じるのである。

二

絶対は感覺なり

絶対とは何ぞ。といふことに就て、なほその研究を進めて行くくと、前述の如く絶対は思想であるといひ得る如く又絶対は感覺感情であるといひ得るのである。

即ち宇宙と、吾等人間の身體といふことに就て考へて見ると、宇宙の身體である自然は絶対の感覺感情の表徴であるといふことを了解するのである。最もこれは植物以下無機體に就いていふと、その感覺は眠つて居りその感情は動かない、とも見えるけれど實はさうではない。たゞ人間の眼に映る程度の差で

あるのである、それ故これ等に就いても深く研究して行くと宇宙——絶對の力は其所にも充溢して居ることが解る。その力といふものは即ち感情で自然に體現する美の根本である。——例へばかの雨の音、風の聲は無心の如く、又有意の如く吾等人間の感情を刺戟する。この音が人間の耳に震動を與ふる力の根本は即感情である。——されば無心に輝く日の光り、冷たくそぐ雨の音も皆絶對の力である。即ち絶對の感情表現である。彼の春、夏、秋、冬にさまざまに異なる美觀、山岳、都市、さまざまの形態に對して人間が感ずる壯嚴の感、敬虔の念は皆自然の感情の表れから與へらるゝ人間の同感共鳴である。この感情が形に色に空間的關係を以て表はれたものが繪畫、彫刻、自然の藝術である、これ即吾人をして絶對は感情であると云はしめた所以である。中にもこの自然の感情を最よく表現して居るものは音樂的藝術である。——雨の音、風の聲、蟲の音、鳥の囀り皆この天地自然の感情を謳ふものである。彼のベトーベン、ワグナーの音樂も皆人間が自然より與へられたる感情の自由を以て創造したものである。

宇宙絶對の感情が音樂に表現れたる如く、宇宙の凡てのもの——花の中にもアトームの中にもその間に差等種類はあるけれど、各々其の同じ要素を與へられて居るのである、唯これを

聞き得ないのは人間の聞く耳の感覺が不完全である爲めである、昔聖人は鳥の聲を解し鳥と話をしたといふことであるがこれ等は必ずしも架空な傳説ではあるまいと思ふ。如何なるものゝ中にも絶對の感情は動いて居る、この感情のさゝやきが或るものには聲となり律となりて人々の感覺に訴へるのである、即宇宙の感情が音調に現はれた所の美である。それが自然の論理に叶ひたるものである、これを以ても矢張絶對は感情であるといふことが出来る。即音樂は根本的に自然の感情に起因して居る、宇宙は亦この感情的調和であるといふことが出来る。

そこで、宇宙の音樂は絶對の感情が人間の感情に訴へる聲、精神と精神が共に相喜び相樂しむところの感情の共鳴である、即音調に表はれたる自然の美、絶對の美の要素である。

されば吾人が絶對と合體する——神の經驗を了解するといふことは先づこの音樂から受ける感情に依つて初めてその境域に入るのである、音樂は神と——絶對と共鳴同情する藝術と云ふも可ならんと思ふ。

更に今一步高調に達したる感覺は道德的感情——云ひ換ふれば最高の精神的價值である、これを名づけて善或は善意志或は高尚なる感覺といふ。この感覺の發達したるものを良心といふ。所謂道德的生活、愛の生活といふ即吾等人間の生活の最高

要素である。この感情は凡ての感情の調和したるもので即他愛の生活である。絶對に奉仕したる満足の狀態、人間最上の幸福生活である。

三

絶對は意志である

人間は常に何物かを求めて居る。即我等は常に何物かを要求し追求し憧憬して止まない、さうして其求むる心を集中して居る、否自然に其所に引つけられて行くのである。内より外に展びんとする心はそれである。即人間の自發力である。この力はかの盲目的でなくして常に目的を有する所の力である。即理想實現の力、生の發展を欲する所の力である。

これは人間の凡ての力の根柢であつて、その感覺感情がよく整理統一したる時の調和されたる力、名づけて意志というて居る。この力は人間の力の根柢であると信ずると同時に又宇宙の根柢であることを信ずることが出来る。

絶對は思想である。感覺である、それには絶對の力がある、この力は宇宙に充滿して無限なものである、而も此力の動く處は常に目的を有し理想を有し、それを實現、發展せんとして居る、恰も人間が常に何物か目的を見出してそれに向つて追求憧

憬するが如くに、絶對の力も亦不斷にその目的に向つて進行して居るのである。

これ、即絶對の意志である。意志の根柢は感覺である。又思想である。之等が整理統一せられたる時、其處に絶對の意志と名づくるものを見ることが出来る。絶對は意志であるといふ所以は茲に在るのである。而して、其絶對意志の力の實現するといふ事は、とりもなほさずこれを永久に保留する力、それである。

我等の眼に映ずる宇宙は即この過古の力の習慣力で出来た世界の物質である。宇宙の力は實現すると同時に保存せられて、それは次の働きのもとゝなつて居る。それ等の力は又自由選擇が出来るものであつて、目的にかなふものは保留し、これに反するものは自然に放棄^すらるゝものである、即理想目的に向つて撰一し、決定し、これと反抗するものを制禦する力がある。恰吾人が目的に向つて集中し、目的に對する自由選擇の力を有するが如く、宇宙にもこれと同質の力がある。

我は絶對なり

以上の如く吾等人間の本質は自然が示す宇宙の本質と同じものである。云ひ換ふれば吾等の憧憬する絶對神の本質は吾等人

間の本質と同一のものである。唯其體現の差、程度の差である。而して、我等は常に人間として假りに限られたるその制限を、より減じ、障害をより解除してかの無限の絶対、無差別の神と共に生きんことを欲求して居る。而し又其絶対と人間と、その體現する所の異なる如く、この兩者の間は隔つて居る。されば、人間が絶対本質を知らんとすればたゞ其の間の中介者に依るの外はない。而して其の中介となるもの、示す處を客觀的に又主觀的に研究し、追求したる結果は如上の如く、絶対は思想であり、又感情²である、即愛である。又意志³である。

但しこの三要素は唯吾等が了解の爲めに分つたものであつて、實はこの三要素として分ち説明することの出來ぬ。さなりでこれ等は決して分解し難き調和統一されたる無限の生命である。生きたる有機的關係である。これは空想抽象ではない宇宙の普遍の本質である。此普遍より生れて特殊的の活らきを表はしたるものが吾等人間である。

絶対は完全無限の人格

絶対は普遍である。かの神在さざる所なしと云ひ又如何なる人にも内在の神を認めることが出來るといふはそれである。神は無限完全なる人格である、こは即絶対を人格化していふ時の

言葉である。されば神の光りを見、絶対と共に生くといふことは其本質の一點を見出してこれに觸れんとすることである。其一點は何か？ 即我れ自身である。自分という鍵を以て開けば即絶対に觸れ、神を見ることが出來るのである。そして又他の一つの方面では我自身が神を體現することである。神の思想を我が思想とし、神の感覺を我が感覺とし、神の愛を愛とし、神と共に考へ神と共に語るといふことである。

(「家庭週報」第三百四十八、五十號) 大正五年一月

大學教育法改善案

大學教育の改善すべきもの甚だ多し。學生の卒業年齢低下と共に、其の教育法を改め、以て大學の教育能率を増進するは其の最たるものなり。今や文化の進歩駁々として止まず、社會萬般の事、日に月に其の態を改むるの時に當り、獨り大學教育の方法のみ、十年一日の如く舊套を守るは、決して賢明忠實を以て稱すべからず。殊に其の修業年限を短縮して、而も同時に教育の効果を減ぜざらんと欲せば、學科課程の編制、教授學習の方法に多大の改善を加ふるを要するは固より言を俟たざる所にして、更に進みては、短縮より生ずる損害を補ひたる上に、時勢

に應ずる新功績を擧ぐるを期すべきなり。今左に其の改善の主要方針を開陳し、教育改善の爲に憂ひを同じくせらるゝ人士の参考に資するところあらんとす。

第一 大學教育要旨

深く専門の研究に入らんが爲には廣き基礎的知識を要すると同時に、又専門に偏して常識を缺き、遂に健全なる社會生活を營むこと能はざるが如き人物を作らざらんが爲にも、學生をして初めは全體に通じて略々同様なる基礎的學習を多からしめ、學年の進むに従ひ、次第に狭く専門に集中せしめて、以て各自の境遇希望に従ひ、其の個性特能を發展せしむるを要するは勿論なり。

大學の豫備教育機關を廢し、中學（及び高等女學校）より直ちに大學に接續する場合には、中學に於ても多少分科制を採用し、生徒の個性と將來の目的とに従つて異なる科目の選擇を許すと同時に、大學に於ては、専門を主として、且常識的基礎的教育をも與へざるべからず。而して常識的基礎的教育を與ふるに要する科目は、各専門に通じて、人格修養乃至理想信念に關係ある學科、思考力の養成に資する學科、及び語學を主とし、其の他各専門に對する特殊の準備學科なり。

大學にても單に或一部門の學科、例せば工學、醫學のみを専門に教授するが如き場合あるべしと雖も、その場合にても前述の如き常識的基礎的教育を與ふることを忽せにすべからず。従つてその爲に要する科目の準備は各部門を有する綜合的大學の場合と異なることなるべし。此の準備なくして、中學教育の基礎の上に、直ちに狭き専門の學術技藝教育を接續せしむるものは即ち所謂専門學校なり。専門學校の大學と異なる要點の一は此所にあり。然れども之程度の差にして、固より根本的の差異には非ず。何となれば、専門學校と雖も、全然人格常識等を無視して、唯一科の知識技能のみを傳授し練習せしむるが如きことあるべからざればなり。

大學入學者の中には、將來専門の技術者、事業家として社會に立たんとする者と、學者として或一科の問題に關して深く學理を攻究せんとする者と、及び人格修養と併せて多少分科的なる高等普通の學科を學ばんとする者との三者あるべきが故に、此の三者の希望をして平等に満足せしむるに足る組織を設くるを必要とす。勿論大學各箇に於ては、此の三者の中一或は二箇の目的に重きを置きて組織を定むるも亦固より差支へなきことなり。大學が右の如き必要に應ぜんが爲には、機關としての組織、學科課程の編制、及び其の教授指導法に於て、如何なる用

意を要すべきか、之實に當事者に取りて、最も重大なる問題ならざるべからず。

畢竟するに、大學殊に其の本科の職能はあらゆる専門家の素地を作ることにして、高き實務的技能の鍛錬は之を社會實地の活動に俟つべく、又或一科の問題に關する深遠なる學理の研究は之を研究科乃至大学院に讓るべきものなれば、大學本科及び研究科の組織、課程、方法は此の必要に應じて考慮せられざるべからず。

勿論大學の職能を如何に定むべきか、從つて大學の本體を何れとすべきかに就いては種々の意見あらん。然れども内外の情勢と現下の社會的要求とより見て、大體右の如くするを適當とし、之が實施の有効適切を期せんが爲の見地より考究を起すものなり。但し學科課程の編制、教授學習の方法に至りては、學制の如何に定めらるゝに關せず、改善の餘地多々あり、從つて此が考究は常に必要なることなりと信す。

第二 學科の部門制及び選擇制

大學の學科課程の編制は、大學の職能の定め方に從ひて異同を生ずべし。然れども、組織を畫一的に定め、學科課程に於ては悉く必修科を規定し、講義に依る一齊教授を主とする方法

は、もはや今日の趨勢と要求とに適せざる舊式の大學教育にして、殊に大學の職能を前述の如く見、學生をして孰れの志望を有するにしても、總て満足なる修養を爲さしめんが爲には、自由選擇制を採り、各學生をして、その志望と性能とに從つて學科を選択せしめ、各自の課程を編制せしむること、爲さざるべからず。

唯此の自由選擇制を採り、學科課程を全然個人的に定めしむるときは、それにも大體共通的となり、個人的に異なるは一部分のみとなるは實際の結果なるべきにせよ、大學の組織はかなり複雑となり、又自由選擇制は必然學生の自動的學習法を豫定するものなるを以て、設備と教員とに於て多大の經費を要し、學識手腕の優秀を要し、經濟力に乏しき本邦の大學に採用してその完美なる効果を期するが如きは到底望みなきなり。現在の如き必修科制、一齊講義制の行はるゝも單に教育法の研究の進まざるが故のみに非ず、其の經濟力、教授力の乏しき場合に多數の學生を教育する必要上、止むことを得ず此の方法を採るものと見るべし。是故に此の本邦の事情に適應しつゝ、同時に從來の缺點を補ふべき方法を新制の大學に採用せざるべからず。而して其の方法とは即ち學科部門制選擇制なり。

部門制選擇制とは學科を幾多の部門に分ち、之に關する規定

以内に於て學生各自の選修を許す方法にして、其の要は左の如し。

甲、部門制

大學に於て授くる學科目を、其の知職の種類に従ひて、幾團かの部類に分ち、學生が集中の目標、選修の範圍を概定す。之猶現在の分科大學の如しと雖も、分科大學の如く、初めより畫然と各科を分離獨立せしむることなく、互に融通連絡せしめ、學生選擇學習に便にすると同時に教授力の經濟を有効ならしむるなり。例へば

語學、文學、美術等主として藝術學に屬する一團

哲學、倫理學、心理學等主として哲學及び精神科學に屬する

一團

數學、物理學、化學等主として物質科學に屬する一團

動物學、植物學、地質學等主として自然科學に屬する一團

歴史、政治、經濟等主として社會科學に屬する一團

の如くにして、此の外許多の類團乃至部門を設くることを得べし。また此の大體の部門の中に於て、必要に應じ、幾多の小部門を設くるも可なるべし。而して右の部門中に各數科目乃至數十科目の學科を排列し、その中より要求せられたる最少限數以上の科目を選せしむ。

此の學科部門又は分團は、之を一定不動の課程として、何學科を修めんとする者は必ず何部門の全學科目を履修すべしといふが如く、部門を以て全學科課程を形式的に縦斷し、以て學生に其の履修を強制するものに非ず。唯學科及び教授上の整理上必要な規定と、及び學生の人格の發達と、才能の開展との爲に必要な標準を定め、秩序を設け、其の範圍内に於て、各自選修せしむるなり。

此の部門制度は又學年を以て固定的なものとし、之を以て學科と學生とを畫一的に横斷すること、現制度の如きものに非ず。即ち第一年の學生は必ず第一學年の某々學科のみを聽講せざるべからずとせずして、入學後第一年第二年の學生も、或學科は第三年第四年の學生と同時に學習すべく、第三年第四年の學生も亦必要に應じ、第一年第二年の學生と同一學科を同一教室に研究すべし。要するに、大學は學生をして規定の年限間に學せしめ、其の間に規定の知識を系統的に獲得せしむること、故に非常の秀才は四年大學の要求課程を三年間に卒業し、更に以上の研究を爲すことをも爲し得るなり。一方に又工科、醫科等を置く場合には、其の成業に必要な學科目複雑に、且實習を要するが爲に、特殊の規定を要し、たとへ四年度の大學と定むとも、實際に於て特に五年或はそれ以上を以て

漸く全課程を履修し了るを得ることゝなるべきこと、現在の帝國大學の各分科一般にては三年にては卒業するに、醫科にては實際上四年半を要し、其の卒業證書を入手するまでに五年を要すると相似たり。

故に學年の意味は規制と異り、全學科全學生の進程を畫一に表はさずして、各學科研究の順序と各學生在學の年度とを示すに過ぎざることゝなる。従つて又大學の卒業年限を四年とすと定むるも、それは所要の教育を安成するに要する時間の全體の標準を示すものとなり、現在の如き確然たる形式的價値を有するものとは異なる事となるなり。但し各學科研究の順序は略々一定し、各學生の能力も亦相似たるものなれば、實際に於ては學年は略々一定の規律となり、濫りに長短を異にすることなく、形式上一定するも大なる差支へなかるべし。

研究科或は大學院の設置せらるゝ場合には、前述の趣旨に依り、大學と共通の學科多數あることとなるべきを以て、教授力と經費との節約を見るを得べし。此の新制大學と現帝國大學各分科大學との共設せらるゝ場合亦然り。

現帝國大學分科大學を漸次研究科組織に改め、新制大學の卒業生を收容して、専門の研究に従事せしむべきは當然なれども、便宜上當分之を存置すとせば、新制大學に在りて必要なる

一定條件の學習を終りたる者をして、途中より進入せしむることゝして、差支へなかるべし。

乙、選擇制

選擇制度は部門制度と相俟ち、最も有効に大學教育の目的を達する方法にして、學生をして、一定の制度に従ひ、教師指導の下に、自己の志望に適合する學科を選択して、以て各自が學習課程を編成せしむ。

其の規定の一は、初めは基礎學及び人格修養に必要な學科目を選択せしめ、學年の進むに従ひ、専門に分化集中せしむる方針なり。其の二は、學生が志望の知識、技能の完備と、學習の順序とを誤らざらんが爲に、各學年一定數の最少限必修科目數を各部門に於てそれ〴〵に設定し、實際の科目其のもの、及びその以外の學科をば學生の志望と學力とに應じて、自由に選擇せしむることなり。

第一學年と第二學年とに於ては、必修科目を選択すべき部門を全體に通じて同一とし、例せば第一部門にて何科目、第二部門にて何科目といふ如く、一律に規定して可なるべく、その間に専門を決定し、乃ち第三學年第四學年に於ては、其の専門集中部門の學科を主とし、之に他の學科を配して必修科目數を規定し、その以上を各自の自由選擇に任すべし。

或場合には、極く少數の學科目其の者を指定して必修科目とするも亦可ならん。例せば國語漢文一科目三時間、英語二科目六時間は第一學年生全體履修せざるべからず。哲學、哲學史、倫理學、宗教學は全學年間に適宜配當し、全學生必ず履修すべしとする如き是なり。要するに選修制度は從來の如く、學年を唯學科として制度に従つて推し進め、學生をして何等の自由なく制度に従つて追隨せしむる方法と反對に、學生各個をして進んで自ら選擇せしめ、自己の要求する知識を自發的に獲得せしめ行く方法なり。學習上の責任を學校より學生に移す方法なり。自動研究の學習法と相俟つて、最も有効に學生の個性、才能、趣味を活かし、最も強く進取の氣象と學習の努力とを誘發しつゝ、所定の大學教育の目的を達するを得べし。

唯經驗少き青年學生なれば、その將來の目的の爲に必要ならざる學科目を擇び、却つて必要な學科目を捨つるが如きことあるべく、之が爲に無益なる努力を費すこと寧ろ現在に勝るが如き結果を生ぜずとも限られず。又學生の自由意志を尊重するが爲に、怠惰不勉強なる學生をして放恣ならしめ、遂に規律を紊亂するに至らしめずとも限られず。故に自由を重んずる裏面には嚴格なる責任の觀念あるを要し、簡易變通的なる制度の規定には極めて精確周密なる注意計較あるを要し、教師が學生を

指導し、その經驗を以て學生の無經驗を補つて遺漏なからしむるが爲に、鋭き良心と、卓越せる智力、學識、手腕とあるを要す。若し此等の要素なからんか、前述の如き選擇制度は實に無益に歸するのみならず、却つて有害の結果を生ずべし。此の點に關しては、其の場合場合の實地の狀態を調査し、慎重に考究せざるべからず。

第三 教授法の改善——自動學習法

學科課程を固定畫一にせずして、移動變通的にして、學科の個人的分化の範圍を自由にしたる上は、之が實施の効果を擧ぐる方法として 教授法は、必然的に學生個人の活動を基礎とするものならざるべからず。即ち講義筆記を主として、あらゆる知識を教師より授與する消極的受動的方法を改め、學生各自をして積極的發動的に自己の知識を開發し、捕捉せしむる方法を採用せざるべからず。大學に於ける授業法は教授と學習との孰れに重きを置くべきかの問題に就いては多少の議論あるべしと雖も、大體に於て、講義法に依る一齊教授は一時に多數學生を相手として、全體の學習方針或はその總括結論を示し、又は教師の研究を發表するが如き場合に必要なること勿論なれども、之を以て教授法の全部とするが如きは、全く學生自發の活動性

を無視するものにして、夥多の固定必修科目を一律に課すること、共に、甚だ自然に背ける機械的方法たるを免れず。且大學に於て、將來の實地生活に必要な知識を悉く傳授し了るが如きは、到底不可能にして、且有害なることなり。その不可能有害なることなる以上は、必要と豫料せらるゝ知識を一時に他より詰めこむことよりも、寧ろ學生各自をして、必要に應じて其の知識技能を修得する方法を發見せしめ、之に鍊達せしむるの永遠的發達進歩の價値多きは明らかなり。其の孰れの點より見ても、一齊講義の方法を少くし、自動的研究の方法を多く採用せざるべからず。

自動的研究といへば、必然に各學生個人が總て活動する機會を多からしむることを豫料す。一齊講義にありては、學生全體が受動的なると共に、各個人の學習活動はするもせざるも自由なれども、自動を重んずる上は、各個人總て活動せざるべからざるが故に、各個人の才能をして、遺漏なく發達せしむる機會を多からしむ。之實に大學教育として、極めて貴重なる効果なり。

各個人の活動を解放する以上は又各個人の有する心力の全體を活動せしむることを豫料せざるべからず。即ち記憶理解等の精神力以外に想像推理其の他の精神力をも十分に活動せしめざ

るべからず。而して又工夫創始等の統一綜合的精神的活動をも要求するが故に、従つて實驗的研究を重んずること、なる。學科と設備との許す限り學生をして實驗實習を爲さしむるは、實に近世教育進歩の一大特色なりと言ふべし。

實驗實習を重んずるの趣旨を更に擴むれば、研究材料をなるべく架空の事に求めずして、社會實地の生活現象に求むといふこととなる。即ち醫學は目前の患者に研究材料を求め、法學は實際の訴訟事件判決例に材料を求め、家政學は其の社會の家庭生活の觀察調査に端緒を開くが如き之なりとす。

要するに、必修科目にて縦斷し、又學年にて横斷したる固定形式の中に學生を拵めこみ、その上に強課するに、講義に依る一齊教授を以てしたる從來の大學生活を改め、學科を分化的にし、學年を移動的にし、教授よりも學習に重きを置き、教師よりも學生を中心とし、その授業法が個人的、自動的、實驗的に進むこと、之近世教育の趨勢にして、社會進歩の要求なりと言ふべし。

唯此の自動的研究を以て大學の授業法本體とするには、之に應じて設備と教授力とを大いに増加せざるべからず。之經濟力の貧弱なる本邦に於て、十分の採用を難ずる所以にして、その採用し得る範圍に於て採用するの外なきなり。而もその採用し

得る範圍は現狀に於て多々あり、相當に成績を擧ぐるを得べしと信ずるなり。

附記——右の自動的學習法に關する内容の細論は、學科選擇制の説明と共に前ハーヴァード大學總長エリオット博士の記述を借らんとす。之數十年間に亘る熱誠なる實驗に依りて現在の實行狀況を語るものに聽くの、寧ろ賢明なる仕方なるを思へばなり。勿論米國大學に於ける方法は之を移してそのまゝ直ちに本邦に用ふべきに非ず、又博士は部門制よりも自由選擇制を力説せりと雖も、參考説明としては、最も有力なる材料たるを見るなり。

吾人は固より全然博士の説を是認するものに非ず、間々同意し難き節ありと雖も、博士は實に此の制度の創始者にして、其の長年月間の努力によりて積集せる經驗や極めて貴重なり。且ハーヴァード大學は爾後引き續き改良を加へ、効果見るべきものあり。これ博士が經驗を披瀝せる著述の一部を摘載する所以なりとす。——エリオット博士著『大學の管理』略

大正五年二月

家庭も立憲的に

國家が專制から立憲に進み、社會が斬捨御免時代から人權を重んずる四民平等の時代に進んで來たのに家庭ばかりが何時までも、封建時代の遺風を其のまゝ保つて行かうとしても、到底行はれない話である。だから、男子の我儘壓制を當然の事の如く許して居た家庭や一方の人權を蹂躪する機會の多い姑嫁同居の制度などは、漸次改まつて行くであらうと思ふが、然し此の種、家庭の組織とか習俗とかいふものは、人力を以て強ひて改革しようとしても、到底目的の達し得られるものでない。

多年の習慣歴史といふものは、恐るべき潛勢力を有して、個人の自由を束縛するし、一方には又、經濟上の關係があるから、たとひ斯うするのが可いと分つて居ても、なか／＼容易くそれを實行することは出来ない。だからといつて、研究せずに放任しておいては、進歩向上といふことは期せられないから、一方では研究し、教育し、他方では忍耐し我慢し、そして徐ろに時代の進展を待たなければならぬ。

或は、女を教育するのは彼等をして不幸ならしむるものではないか、といふ人がある。一面から見ればさう見える。專制時代の人民の如く、依らしむべし知らしむべからずとしてすむ事ならば、其の方が女の爲めには幸福であるかも知れんが、社會の風はあらゆる機會を以て新しい思想を若い女の耳目に運び、

よし學校で教はらないでも、さういふ方面の智識だけは立派に發達するものであるから、今後は最早「知しむべからず」といふ事は行はれない、寧ろ大に知らしめ、徹底的に知らしめるのが得策である。姑嫁の問題の如きもいづれか一方が徹底的に道理を解し人情を汲む人であれば、問題にはならないのである。

〔婦女新聞〕八百二十號 大正五年二月

教育尊重の實を促進する方策

教育尊重の實を促進する方策としては種々あるであらうが、孰れにしても、其の基礎となるべき根本要件は、必ず教育其の者に存しなくてはならないと思ふ。即ち第一には教育の内容を十分適切に改善して、個人及び社會の實生活に偉大な効果を示すといふことである。若し教育にして緊要缺くべからざるものにして、且つ効益確實偉大なるものであることの實證が眼前に擧示されるならば、如何なる時代でも、如何なる場合にも、教育は必ず尊重されるに違ひない。教育の尊重されなないのは、尊重を値ひするだけの實力を示さないからである。而して尊重に値ひする實なくして、他に策を講じて尊重させようとしても、それは無理である。併し教育の効果を十分に示すといふこと

は、根本の要件であるだけに又永遠の問題であつて、此れなくしては他の方策も無用に歸する代りに、又今早速その實證をあげるといふわけにはゆかぬ。

第二の根本要件は教育者自らその業務を尊敬するといふことである。更に言はゞ教育者が更に大に教育を尊敬し、且つ教育者たる自己を尊敬するといふことである。苟も教育に従事する者に向つて、今更に教育を尊敬せよ、教育者たる自己を尊敬せよといふのは無意義に近いといふ人があるかも知れないが、私の意味を平たく言ひ直せば、更に發奮して一層努力する必要があるといふのである。教育者の總てが果して徹底的に自己の業務を尊重してあるであらうか。最も嚴格な自己反省と自己批判との眼を開いたとき、我れこそは教育者としての責任を究極まで盡し終れりと斷言することの出来る人があるであらうか。社會をして教育を尊重せしめんが爲には、教育者が先づ更に大に熱誠に深切に嚴肅に周到に努力しなくてはならない餘地がまだあるのではなからうか。若しそこに聊かたりともその餘地があるとすれば、それを差し措いて教育尊重の風を社會に起さうとしても、それは無理である。故に教育尊重の風を起す根本策の一は、教育者先づ自らその仕事を尊重し、地位を尊重し、資格を尊重することではなければならない。

教育者自身の奮發は固よりのことであるが、併しそれは又その境遇の如何に依つて大に刺戟されるものであるから、社會が教育者を優待するといふことがなくてはならぬ。而して社會の

此の意志を代表し、又その思想を指導しつゝ、教育者優待の實行を爲すものは政府の當局であるから、政府は更に教育者の待遇を善くして、その地位を高めなければならぬ。此が教育尊重の風を起す第三策である。現在のやうに物質供給の上からも、社會的地位の上からも、種々の榮譽特典の上からも、教育者は他の軍人や官吏の下に居て、如何に努力しても、亦いかに優秀でも、軍人や官吏の上に出ることは愚か、彼等と平行することすらも期し難いとすれば、教育者及び教育に對する社會の尊敬を促進することは出来ない。地方でも町村でも教員を低い雇人扱にしてゐる現狀を改めない限りは教員に優秀な人を得ることは出来ず、従つて教育事業の眞効を望むことが出来ない。國家が教員を一段低いものにしてゐる現狀を改めると共に、教育の職務の上でも、極めて乏しい設備で、非常に多數の兒童を受け持たせ、その上教授以外に、餘り必要でない形式的の雜務を取扱はせるやうな現狀を改め、而して更に種々修養進歩の機會を與へ、教師の熱誠と努力とを開發するやうに政府が注意することは、教育尊重の風を起す上に、最も喫緊の問題であると思ふ。

ふ。

第四には國家が教育に對して今少し金をかけることである。地方費町村費まで合算すれば、教育費は十分の一位に當るであらうが、政府の支出は僅かに全歳出の五十分の一にも足らない。國としてこんなに教育費を使はない國は他の強國にはあまり例がないのである。乏しい費用で無理な教育をして、それでも大學や専門學校などの機關の不足の爲めに、どれだけ有爲な青年を傷けてゐるかわからない。費用が乏しく設備が足りないでは、教員も働きやうがないし、効果も舉らない、又教員の待遇も出来ない。従つて教育尊重の實も舉らないことになる。それゆゑに教育尊重の實を促進する外的要件の喫緊問題は國家が今少し教育に金をかけることである。

要件は他にも種々あるであらうが、重大なる事項として先づ前述の四條を數へることが出来ると思ふ。

〔内外教育評論〕第十卷第二號 大正五年二月

信念と人格

一 如何にして信念を體得するか

顧みれば我等に若し我等の精神を統一する何ものもなかつた

ならば、その日常の修養生活は如何ばかり不安なものであらう。さうして自覺するが如くこの貧弱なる智識と經驗を以て變化極りなき人生の行路を辿つて行くのは恰盲人が杖もなく音響もない無明の境をさまよい歩くやうである。不安、孤獨、煩悶、自暴自棄は相踵いで其の精神を攪亂し來ることは當然の道筋である。

實に人間は生れながらにしてその孤獨を厭ひ、その不安を恐れ、その煩悶を忌むのである。此の心は常に不安より安心に、煩悶より大悟に、孤獨より愛の生活に入らんことを追求渴望してゐる。信念生活は即ちその追求渴望する理想に達せんとする修養生活の中心問題である。人生の活動になくてならぬ原動力である。即ち信念を體得するといふことは人生死活の問題であつて、人の眞の満足も失敗も此の中に横つてゐるのである。

されば我等は如何にして此の信念生活に入るかを考へなければならぬ。云ひ換ふれば、我等は如何にして我が人格に信念を體得し得るかといふことである。それは即ち信念研究の最後に到達すべき問題である。

信念をわが人格に體得するといふは即ち神（宇宙、絶對）の心をわが心とするといふことである。神の意志を體得することである。さうして神と共に働き、神と共に進化するといふので

ある。

云ふまでもなく我等人間の自己は極めて微弱である、けれども常に創造的であり常に向上進化して居る。此の創造し向上し進化して行くといふことは人間本來の性質であると同時に宇宙の法則であり神の心である。（神は進化であるからである）されば人間がその心の芽を育て、その理想を追求し進化發展して行くことはこれ即ち神と共同し、宇宙の法則に調和合體することである。とりもなほさず神の心を心とし、神の生命の永久と共に人間も亦永久生命に入ることが出来るのである。其の生活は常に信仰があり希望があり創造があり進化がある、即ち信念生活である。人の、斯の如き微妙なる精神的震動は如何にして何處より來るのであるかといふと、それは即ち人間に與へられた感情の活らきである。この力が神の暗示を受け神の心を感じ、神の意志を體得するのである。この感情の力は人間の意志の力となつて其所に思想が湧き、目的が立ち、計畫が出来て人間生活の活動實行となるのである。

そこで人間の自我といふものゝ一面には宇宙の法則と共に絶對の權威を持して他の何物にも促がされず、依囑せず獨立獨歩の自發的活動を營むものであるが、その自發的活動たるや又宇宙の法則と共に凡ての關係を離れて即ち孤立して成長發達する

といふことは出来ない。それは物質的にも精神的にも決して初めより孤立して生れ孤立して成長するものではない。人と人、物と物とは必ず相関係し、相互に影響を及ぼして初めて其の成長を助けその發展を促がして居るといふ事は今茲に更めて例證を擧ぐる迄もないことであるかもしれぬ。

即ち人間の力の根柢は感情である。その感情の力は孤立して居るものではない、即ち或るものに與へ、與へらるゝ無形の精神的震動の力、精神的傳播の力である。

されば茲に云ふ信念生活も或る意味から云へば人間の精神的獨立生活とも云ひ得るものであるけれども、この獨立といふ意味は決して人を離れ、社會を離れ神を離れて孤立無關係になることをいふのではない、内なる心の發動創造の獨立である、之は人間各自の天赋獨立特種の個性である。この個性は孤立獨立で成長發展するものではない。必ず他の誘導關係によりて初めて啓發されるものである。

而しそれは必ずしも有形具體の媒介を俟たず人間の感情はよく無形の媒介によりて感應することが出来る、即ち心と心の活らき、氣分と氣分の傳播所謂暗示インスピレーションといふものを受け入れることが出来るのである、云ひ換ふれば精神の交通である。自己の精神と、自己以外の普遍的精神と交通し感應する活らきであ

る。これを人間の直感といふのである。

二 物質幻影説

ところでこれに對しては又種々なる極端なる説もある、或る一派の説では『人間の活らきの中にもその最も高尚なる活動とする所の精神作用が凡て直感を以て行くものならばその外形即ち人の身體といふものは無用の長物ではないか、殊に人はその身體よりさまざまの苦しみ、病氣、煩悶を作るではないか、さうすれば無用物であるばかりでなく却つて人間の罪惡を生む邪魔者である。されば理想に生んとする者は必ず先づ此身體といふ邪魔者を取り除いた方がよい』といふのである。この説は唯神論者又一元論者の間では勢力ある説であつて彼のミセスエツヂーのアメリカンサイエンスなどは多くこの説に基いたものである。その説に

『神と精神(靈)が永久のものである

身體と物質とは無である幻影である』

と云つて居る。又曰く

『試みにその確信を以つてすれば人間が忌み惱まざるゝ病氣も苦にならない、煩悶もない、何故ならばそれ等は皆幻影であるからである、物質は實體ではない、迷ひである、人間が想像

で作つた習慣的概念である、迷信である、これを信じさへしなれば即ちその精神から離してしまへば病氣も煩悶もない。言ひ換ふれば病氣を治療するといふことは人間に病氣といふことがあると信じて居るのを止めさへすれば療る』

といふのである。この説の主張する所は人間の病氣ばかりではない、それに對する身體の健康といふことも實はないのである、空氣もない世界といふものもない天體といふものもないそれ等物質は皆吾れ等人間の幻影である、形に見えるといふことばかりが幻影ではない、無くなること、人間の死といふことも習慣的に信じた迷信である。この死ぬといふ迷信を去りさへすれば人間に死といふことはない、宇宙には生きるといふことより外に何物もないと信ずるのである。つまり宇宙間ありとある物質界の現象は人間の心が妄りに作り出した誤謬であるとしたのである。

併し我れ等はこの説を全く信ずることは出来ない。

既に如上の各章に於て述べたる如く宇宙の靈界に對する自然界、人の精神に對する肉體といふものは靈(神)の表徴たる自然であるが如く、精神を形に表はす處の人間の肉體であるが故にこれを離して考へることはどうしても出来ないことである。のみならず寧ろ精神の芽はその身體といふ畑がなくては成長も發

展も出来ない、それ故身體は精神と共になくてはならぬ人間靈性の一面である。尠くとも精神活動に必要な材料である、又凡ての物質はそれを利用するに従つて前にも述べたる如く精神界の電線となるものである、又直ちに精神の發現である。

斯くの如く、身體と精神とは絶對に無關係のものではない。唯併し、精神界の法則には自由があり不休の成長發展があり常に進歩し常に動的であるのに比べて物質界の法則は一定の型を成して固定的である、さうすると茲に死といふ問題が起つて來る。一つは無窮で一つは有限である、この二つをどうしても離して考ふることが出来ぬものとすれば其處に兩者の調和すべき點を見出さなければならぬ、身體と精神との關係、靈界と物質界との關係を更に明瞭に了解しなければならぬ。

三 神と我れ(自己)との關係

神は人間の本源である、人間は神の分れである、其間の關係は有情的である、この感情が互に活らきかけ活らき合ふ事を神と人との交通が出来たといふのである、其處には信賴があり友情が起つて來る。

それ故、神と人との間は遠い者の様に考へられて居るけれど實は最も近い關係である、即ち神と共に考へ神に相談し神と相

互の感情的生活が出来、神と共に創造的生活が出来るといふ近い関係である。

次に、その神と我れとの感情又は意志を發表する上に大切な精神生活即ち自と他との精神關係も亦個的になつて表はるゝものである。即ち神と我れと、普遍(神)と普遍の一部分(人間)とが相愛し相信するといふことは我れ等の日常生活に於ける兄弟關係、父子關係、夫婦關係、友情關係等の理想的愛の生活が行はれ徹底することに依つてその神の精神を理解することが出来るのである、つまり神と我との關係もそれと同じものであるからである。

第三には神と我との關係は以上の如く常に普遍より個的に向つてのみ活らく感情ばかりではなく、それは或る場合には反對の位置に表はれて個的より普遍に向つて活らく意志ともなるのである。神と我との感情が相交通する時、それはやがて意志の力となり、目的となり創造力となるのである。即ち人間世界の美術、音楽、教育は凡て神の感情を讀むことに依つて作りなす人間の創造である、この創造は人々の自己の生活及自己の社會、國家に對して活らく、それは即ち宇宙の創造となるものである。つまり個的から普遍的に擴大するのである。これが神の普遍的愛である、即ち精神の調和者、人格の調和者のつくりな

す世界である、或る人はこれを天國と呼び或る人はこれを極樂と名づける。即ち理想的愛の實現せる世界である。理想的人格の調和せる形である。人の信念生活の歸趣である。

〔家庭週報〕第三百六十・六十二號) 大正五年三・四月